

『朱子語類』訓門人訳注（四）

— 卷一二七・1条〜44条 —

『朱子語類』訓門人研究会

本稿は、二〇〇七年秋に発足した『朱子語類』訓門人研究会の二〇一〇年の成果である。本研究会は、『朱子語類』訓門人（卷一一三〜卷一二二）の全訳を目指して、隔週で活動を続けている。（会の発足の経緯に關しては本誌第一六号参照。）

本稿の作成は、参加者が順番に訳注原稿を作成し、それを共同で検討した後修正を加え、さらに最終的に訳文の統一をはかるために垣内が加筆・修正をした。訳注原稿の担当者は、各箇所最後にその氏名を記した。

（垣内 景子）

今年度の研究会の参加者は以下の通りである。

宮下和大（麗澤大学モラロジー研究所専任研究員）・阿部光麿（早稲田大学講師）・松野敏之（早稲田大学講師）・中嶋諒（早稲田大学院博士後期課程）・小池直（早稲田大学院博士後期課程）

- ・阿部亘（早稲田大学大学院博士後期課程）・原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学大学院博士後期課程）
- ・田村有見恵（早稲田大学大学院博士後期課程）
- ・梶田祥嗣（早稲田大学大学院博士後期課程）
- ・佐々木仁美（早稲田大学大学院博士後期課程）
- ・江波戸瓦（早稲田大学大学院修士課程）
- ・許家晟（早稲田大学大学院修士課程）

凡例

※ 底本は、中華書局・理学叢書『朱子語類』を用いたが、标点等は適宜改めた部分もある。

※ 校注は以下の四本を参照し、各略称を用いた。

- ・『朝鮮古写 徽州本朱子語類』（中文出版社） …… 楠本本
- ・『朝鮮整版 朱子語類』（中文出版社） …… 朝鮮整版
- ・『朱子語類』（正中書局） …… 正中書局本
- ・『朱子語類大全』（和刻本・中文出版社） …… 和刻本

なお、次の字の異同については、一々注記しなかった。

- 「著」⇔「着」
- 「箇」⇔「个」
- 「辨」⇔「辯」
- 「它」⇔「他」
- 「于」⇔「於」
- 「邊」⇔「邊」⇔「辺」

また、以上の四本において底本とは異なる巻に収録されている場合、巻数と共にページ数を明示した。

※ 原文・訳文中の「 」は小字注部分である。

※注で用いた略称は以下の通り。

・『語類』：『朱子語類』 なお、『語類』からの引用は、巻数と条数のみを記した（括弧内の頁数は底本のもの）。

・『遺書』：『河南程氏遺書』（中華書局・理学叢書『二程集』（括弧内の頁数は上記のもの））

・『門人』：『朱子門人』（陳榮捷、台湾学生書局）

・『資料索引』：『宋人伝記資料索引』（中華書局）

・『学案』：『宋元学案』（中華書局）

・『考文解義』：『朱子語類考文解義』（李宜哲、民族文化文庫）

卷一一七 朱子十四 訓門人五

【一一七・一（底）】

黄直卿（榦）は読解力はあるのだが、ただ気象に欠けたところがあり、それ故時々読み方によくないことがある。「陳文蔚」

黄直卿會看文字、只是氣象⁽¹⁾、少⁽²⁾、間或⁽²⁾、又有看得不好處。「文蔚」

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(校2) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「少」を「小」に作る。

(1) 氣象 人物をトータルに評価する際に、北宋以来の道学者たちが好んで用いる観点。人柄の大きさや深さ、あるいはそれらが外に醸し出す全体的な雰囲気と総合したもの。朱子たちは、聖賢の「氣象」を理想として、現実の自らの「氣象の涵養」に努めることを課題とした。

(2) 間或 まま、時々、たまに。

【一一七・二 (校1)】

話が程正思(端蒙)の「小学字訓」に及んだ折、

直卿(黄榦)「こういつた書物はやはり作り難いものです。例えば「中」について、偏りが無いという意味の「中」をいうばかりで、過不及がないという意味の「中」にはまったく触れられていません。」

朱子「たしかにこういつた書物を作るのは難しい。例えば「仁」ならば、「偏言の仁(仁義礼智のうちの一つとしての仁)」は説明できても、それら四者を包括する「仁」についてはまったく説明できていない。」

「楊至」「(楊)若海の記録「(この「小学字訓」の書は)一つの大『爾雅』だ。」」

因說正思小學字訓⁽¹⁾、直卿云「此等文字亦難做。如中、只說得無倚之中、不會說得無過不及之中⁽²⁾。」曰「便是此等文字難做、如仁、只說得偏言之仁、不會說得包四者之仁⁽³⁾。」「至」「若海錄云「一部大爾雅⁽⁴⁾。」「(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(1) 正思小學字訓 『文集』卷五〇「答程正思」第十八書「小學字訓甚佳、言語雖不多、却是一部大爾雅也」。

(2) 如中、只說得無倚之中、不會說得無過不及之中 『中庸章句』冒頭の題名に付せられた注に「中者、不偏不倚、無過不及之名」とある。『中庸或問』の冒頭、及び『語類』卷六二参照。

(3) 如仁、只說得偏言之仁、不會說得包四者之仁 『程氏易伝』乾(六九七頁)「四德之元、猶五常之仁。偏言則一事、專言則包四者」。

(4) 一部大爾雅 注(1) 参照。『爾雅』は、古代の儒者が古典の用語の解説をまとめた字書。

【一一七・三(校1)】

先生は程正思(端蒙)の訃報を聞いて、哭泣して悲しまれた。「葉賀孫」

先生聞程正思死⁽¹⁾、哭之哀。「賀孫」

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(1) 程正思死 一一九一年、朱熹六一歳の時。『文集』卷九〇「程君正思墓表」、卷八五「程正思画像賛」参照。

【一一七・4 (校1)】

程正思(端蒙)の学生の一人がやって来て挨拶をした。座が定まると、先生は悲しげな面持ちで言われた。朱子「正思(程端蒙)は惜しいことをした。彼には気骨があり、志と節操があつた。道理の理解にはやや雑なところがあつたが。」「孫自修」

有程正思一學生來謁、坐定、蹙額^(校2)云「正思可惜。有骨肋⁽¹⁾^(校3)、有志操。若看道理、也粗些子在。」

〔自修〕

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(校2) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「額」を「頰」に作る。

(校3) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「肋」を「筋」に作る。

(1) 有骨肋 気骨のある、骨のある、気概のある。卷六一・76条(二四七七頁)「狂狷是箇有骨肋底人、

郷原是箇無骨肋底人」。

【一一七・五校下】

修養の項目と順序をお尋ねした。

朱子「日頃から学ぶ者たちに言っているように、修養というのは遅々として時間がかかっても、多く積み重ねてゆけば、自ずと貫通するところが出て来るものだ。たとえば『論語』や『孟子』は頭から読まなければいけない。本文を基にして、注釈の諸家が本文の意味をどのように言い表しているのかを読むのだ。先ずは平易なところから努力してゆけば、同様のものから次第次第に理解できるようになり、そうすれば難しいところも自ずと意味が分かるようになる。『孟子』の「養氣」の説など、どうしてすぐに理解することができようか。『孟子』全体の七篇を玩味できてこそ、ようやく意味が分かるのだ。たとえるならば、一本の材木は、先ずは簡単などころから削ってこそ、削りにくいところでもひと削りで削り落とすことができるのだ。いま先に簡単などころを片付けないで、やみくもに難しいところに力を注ぐから、何も得るところのないうちに行き詰まってしまうのだ。」以下、周謨への訓戒。」

問工夫節目次第。曰校二「尋常與學者說校三做工夫校四甚遲鈍、但積累得多、自有貫通處。且如論孟、須從頭看、以正文爲正、却看諸家說狀校一得正文之意如何。且校五自平易處作工夫、觸類校二有得、則於難處自

見得意思。如養氣之說⁽³⁾、豈可驟然理會。候玩味得七篇了、漸覺得意思。如一件木頭、須先剗削平易處、至難處、一削可除也。今不先治平易處、而徒用力於其所難、所以未有得而先自困也。〔以下訓讀。〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五六四頁)に収める。

(校2) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校3) 楠本本は「説」字を欠く。

(校4) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「工夫」を「功夫」に作る。下文の「工夫」も同じ。

(校5) 楠本本は「且」の後ろに「如此」が入る。

(1) 状 言い表す、形容する。卷七六・23条(一九四四頁)「聖人下此八字、極狀得性情盡」、卷九五・12条(二四一九頁)「生之性、也只是狀得仁之體」。

(2) 觸類 同類のものに触発されて次々と、ひとつひとつ次第に隔々まで。『易』繫辭上「八卦而小成、引而伸之、觸類而長之、天下之能事畢矣」。卷十三・8条(二二三頁)「既探討得是當、又且放頓寬大

田地、待觸類、自然有會合處」。

(3) 養氣之說 『孟子』公孫丑上「我善養吾浩然之氣」。

周謨「私は郷里で、ぐずぐず意気地がなく、人のいいなりになってしまっていることが多いと感じてお
ります。このままでは、（孟子が、孔子が「徳の賊」と非難した「郷原」をいった）「流俗と同じくし、汚
世に合わす」過ちを免れないのではないかと恐れております。」

朱子「『論語』に）「孔子、郷党において、恂恂如たり。言ふこと能はざる者に似たり（孔子は郷里では
控えめで、ものが言えない者のようであった）」とある。郷里にいる時は、もちろん人情を十分に尽さなけ
ればならないが、是非だけは分別しなければならぬ。ひたすらまわりの言うことに従って、自分を失って
しまつてはいけぬのだ。天下の物事は、是か非か、どちらかしかない。是は是、非は非だ。」

周謨「是非にも自ずと衆見の一致する公論があるのでしようか。」

朱子「そういう言い方をすれば、もう違つてしまつてゐる。是非はあくまでも是非、どうして是非の外に、
もう一つ公論などというものがあろうか。公論があるというならば、私論があることになる。こういつたこ
とこそ、よく見極めなければならぬ。」

問^{〔段2〕}「謨於郷曲、自覺委靡隨順處多、恐不免有同流合汙^{〔1〕}之失。」曰^{〔段3〕}「孔子於郷黨、恂恂如也、似
不能言者^{〔2〕}。處郷曲、固要人情周盡、但須分別是非、不要一面^{〔段4〕}隨順、失了自家。天下事、只有一箇是、
一箇非、是底便是、非底便非。」問^{〔段5〕}「是非自有公論^{〔段6〕}。」曰「如此說、便不是了。是非只是是非、如何
是非之外、更有一箇公論。才說有箇公論、便又有箇私論也。此却^{〔段7〕}不可不察。」^{〔段8〕}

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五六三頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」字を欠く。

(校3) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校4) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「一面」を「一向」に作る。

(校5) 楠本本は「問」を「問曰」に作る。

(校6) 楠本本は「論」の後ろに「敷」が入る。

(校7) 楠本本は「却」字を欠く。

(校8) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「以下訓謨」の小字注あり。

(1) 同流合汗 『孟子』尽心下「萬子曰、一郷皆稱原人焉、無所往而不爲原人、孔子以爲德之賊、何哉。曰、非之無學也、刺之無刺也。同乎流俗、合乎汙世、居之似忠信、行之似廉潔、衆皆悅之、自以爲是、而不可與入堯舜之道、故曰德之賊也。」

(2) 孔子於郷黨、恂恂如也、似不能言者 『論語』郷党。

(1) 6条担当 田村 有見恵

【一一七・七(校一)】

周謨「私は、私欲をまだ完全に無くすことはできていませんが、それでもそういった気持ちが始めた

時には克服するよう努めておきますと、やや心がすつきりして、以前よりはいくらか進歩したように感じておられます。この上は、どのようにしていけばよいでしょうか。」

朱子「それは無理矢理抑えつけているに過ぎない。天理をすっかり自分のもののできていないうちは、ちよつと氣を抜けばすぐに欠点が出て来るもの、氣をつけないければいけない。」

周謨「五峰（胡宏）に「天理と人欲は、同行異情（行ないとしての現れは同じであるが、内情は異なる）」という言葉があります、ここにおいてこそ、天理と人欲を区別しなければならぬのですね。」

朱子「同行異情」というのは、腹が減れば食らい、のどが渴けば飲むというレベルのことについて言っているに過ぎず、それでも聖賢においては天理でないものではなく、小人においては私欲でないものはない。所謂「同行異情」とは、それだけのことだ。こういったことは、もし本質のところを探り当てられなければ、ただ天理や人欲という名義上の区別ができるだけのこと、名義の上でどれだけ明確に区別できても、結局のところ自分自身とは関係がない。必ず自分自身に即して、私欲が萌し始めた時はどんなふうか、天理が現れた時はどんなふうかを身をもって理解しなければならぬ。そこにこそ努力のしどころがあるのだ。そもそも人にとつての天理は、万古不変、たとえどれだけ私利私欲に掩われ遮られたとしても、天理は常に動じることなく存在し、いつでも私意の中から現れ出ているのだが、人はそれに気づいていないのだ。それはちよつと光る玉や珍しい貝が砂や小石の中に混じっていて、時を待つてほんの少しづつあちらこちらで見つかるようなものだ。ただこの道理が現れ出たところにおいては、すぐさまそれを察知して取り出さなければいけない。それを少しづつ集めていけば、しだいにそれなりのまとまりになる。自分の良き心が日に月に増して

ゆけば、天理は自ずと純粹堅固になって、昔の私欲というものは自然に消えて退散し、そうしているうちに二度と萌し出すことはなくなるのだ。もしひたすら私欲を克服することばかりに努め、善き心の端緒を養い育てていくことができなければ、自分の心の中の私欲というものと日々格闘することになり、たとえ一時的に抑えこめたとしても、必ずまた起ってくる。そもそも私意を除き去った後で、別に道理を探して、それを主に物事を行なう、というものではない。少しでもそんなふうになれば、それはまた自分の私意なのだ。たとえばある事柄について、こうすれば是、こうすれば非と分かったならば、すぐに是のところから実践してゆくだけのこと、そんなふうにただじつとしているだけではないのだ。何か過ちを犯したならば、必ず後悔するはず、その後悔しているところがまさに天理なのだ。孟子は「牛山の木」について「かくのごとく其れ濯濯なり（濫伐によってはげ山にされ、あのようにテカテカ）」と言いつつ、また「萌蘖生ず（かつては木の芽や小枝が生えていた）」とも言っている。「且昼の為すところ、これを梏亡す（日中の活動によって本来の善き心が台無しにされている）」と言いつつ、また「夜氣の存する所（夜間の平静な気によって善き心を養い保つ）」とも言っている。また、「放心を求む」とあるが、心がすでに放たれてしまった以上、どうしてそれを求めることができるのか。それはただ道理が同じ性に根ざして、渾然一体となって究極の善をなしているからで、だからこそ日常の行ないに發揮される場合にも多くは善なのだ。道理は人が自ら自覚するしかない。どんな極悪人でも、その人が頑なで反省を知らないことだけが問題なのだ。もし内心少しでも落ち着かないところがあるならば、そこから悔い改める。そうすればどうしてまっとうな人間にならないことがあるか。孟子は「人の禽獸に異なる所以の者は幾んど希なり。庶民は之を去り、君子は之を存

す」と言っている。「去る」とは、このほんのちよつとしたものを捨て去ってしまうこと、「存す」とはそれを保っているということだ。学ぶ者はこのことを深く理解しなければいけない。」

私は、何度も先生のお言葉を称賛した。

朱子「そんなふうにすぐに分かったつもりになってはいけない。ある種の話は、しばらく胸に留めてしっかりと咀嚼し、その道理を熟成させなければならぬのだ。その時は明確に言い得ていると思つても、すぐさまよしとしてしまつたら、その場限りの話になりかねない。」

「謨於私欲、未能無之。但此意萌動時、却知用力克除、覺方寸累省、頗勝前日、更當如何^(校2)。」曰^(校3)「此只是強自降伏⁽¹⁾、若未得天理純熟、一旦失覺察、病痛出來、不可不知也。」問^(校4)「五峰所謂天理人欲同行異情⁽²⁾、莫須這裏要分別否。」曰「同行異情、只如飢食渴飲等事、在聖賢無非天理、在小人無非私欲、所謂同行異情者如此。此事若不會尋著本領、只是說得他名義而已。說得名義儘分曉^(校5)、畢竟無與我事。須就自家身上實見得私欲萌動時如何、天理發見時如何、其間正有好用工夫處。蓋天理在人、亘萬古而不泯、任其^(校6)如何蔽錮⁽³⁾、而天理常自若、無時不自私意中發出、但人不自覺。正如明珠大貝、混雜沙礫中、零星星星⁽⁴⁾逐時出來。但只於這箇道理發見處、當下認取、簇合零星、漸成片段。到得自家好底意思日長月益、則天理自然純固、向之所謂私欲者、自然消磨退散、久之不復萌動矣。若專務克治私欲、而不能充長善端、則吾心所謂私欲者日相鬪敵、縱一時按伏得下、又當復作矣。初不道隔去私意後、別尋一箇道理主執而行、才如此、又只是自家私意。只如一件事、見得如此爲是、如此爲非、便從是處行將去、不可只恁休^(校7)。誤了一事、

必須知悔、只這知悔處便是天理。孟子說牛山之木⁽⁶⁾、既曰若此其濯濯也、又曰萌蘖生焉、既曰且晝栝亡⁽⁸⁾、又曰夜氣所存。如說求放心⁽⁶⁾、心既放了、如何又求得⁽⁹⁾。只爲這些道理根於一性者渾然至善、故發於日用者、多是善底。道理只要人自識得、雖至⁽¹⁰⁾惡人、亦只患他頑然不知省悟。若心裏稍知不穩、便從這裏改過、亦豈不可做好人。孟子曰人之所以異於禽獸者幾希。庶民去之、君子存之⁽⁷⁾。去、只是去著這些子。存、只是存著這些子、學者所當深察也。謨再三稱贊⁽¹¹⁾。先生曰「未可如此便做領略⁽⁸⁾過去。有些說話、且留在胸次烹治煅煉、教這道理成熟。若只一時以爲⁽¹²⁾說得明白、便道是了、又恐只做一場話說⁽¹³⁾。」

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四(一五六三頁)に収める。

(校2) 楠本本は「如何」の後ろに「進修」が入る。

(校3) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校4) 楠本本は「問」を「問曰」に作る。

(校5) 楠本本は「只是說得他名義而已、說得名義儘分曉」を「只是說得他名義儘分曉」に作る。

(校6) 「任其」を楠本本・正中書局本は「選甚」に、朝鮮整版・和刻本は「恁甚」に作る。

(校7) 楠本本は「休」を「便休了」に作る。

(校8) 楠本本は「亡」を「之」に作る。

(校9) 楠本本は「又求得」を「求又来得」に作る。

(校10) 楠本本は「雖至」を「至雖」に作る。

(校11) 楠本本は「謨再三稱贊」を「議論至此謨再三稱贊所言之善」に作る。

(校12) 楠本本は「以爲」を「以謂」に作る。

(校13) 楠本本は「話説」を「説話」に作る。

(1) 降伏 降伏させる、制圧する。卷十二・7条(一九九頁)「人只有箇心、若不降伏得、做甚麼人」。

(2) 五峰所謂天理人欲同行異情 胡宏『知言』卷一「天理人欲同體而異用、同行而異情。進修君子宜深

別焉修身」。『文集』卷七三「胡子知言疑義」参照。

(3) 蔽錮 覆い隠す、遮る。卷四・43条(六六頁)「性只是理。然無那天氣地質、則此理沒安頓處。但得氣之清明則不蔽錮、此理順發出來。蔽錮少者、發出來天理勝、蔽錮多者、則私欲勝、便見得本原之性無有不善」。

(4) 零星星星 少しずつ、細々と、ばらばらに。卷十九・8条(四二九頁)「夫子教人、零星星星、說來說去、合來合去、合成一箇大物事」。

(5) 孟子說牛山之木 『孟子』告子上「孟子曰、牛山之木嘗美矣、以其郊於大國也、斧斤伐之、可以爲美乎。是其日夜之所息、雨露之所潤、非無萌蘖之生焉、牛羊又從而牧之、是以若彼濯濯也。人見其濯濯也、以爲未嘗有材焉、此豈山之性也哉。雖存乎人者、豈無仁義之心哉。其所以放其良心者、亦猶斧斤之於木也、且旦而伐之、可以爲美乎。其日夜之所息、平旦之氣、其好惡與人相近也者幾希、則其且晝之所爲、有梏亡之矣。梏之反覆、則其夜氣不足以存、夜氣不足以存、則其違禽獸不遠矣。人見其禽獸也、而以爲未嘗有才焉者、是豈人之情也哉。故苟得其養、無物不長、苟失其養、無物不消。孔子曰、操則存、

舍則亡、出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與」。

(6) 求放心 『孟子』告子上「人有雞犬放、則知求之。有放心、而不知求。學問之道無他、求其放心而已矣」。

(7) 孟子曰人之所以異於禽獸者幾希。庶民去之、君子存之 『孟子』離婁下。

(8) 領略 (大筋を) 理解する、了解する、悟る。卷一・一三・21条(二七四三頁)「蓋此義理儘廣大無窮盡、今日恁他說、亦未必是。又恐他只說到這裏、入深也更有在、若便領略將去、不過是皮膚而已。∴都理會不得底、固當去看、便是領略得去者、亦當如此看」。

(7条担当 許家晟)

【一七・8 (條)】

寒泉でお別れする際に、お教えを請うた。

朱子「議論はすでに話した通り、後はただ実践に努めなさい。」

更にお尋ねすると、

朱子「真に着実な実践に努めなさい。」

ほどなくして、また書簡が届いた。

朱子「別れに際して私が言った「実践に努める」ということについて、道中よく考えてみましたか。今日学ぶ者たちが進歩できない、その欠点はすべてそこに原因があるのです。よくよく理解しなければなりません」

ん。」

寒泉⁽¹⁾之別、請所以教。曰「議論只是如此、但須務實⁽²⁾。」請益。曰「須是下眞實工夫。」未^(校2)幾、復以書來⁽³⁾、曰「臨別所說務實一事、途中曾致思否。^(校3)今日學者不能進步、病痛全在此處、不可不知也。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五六四頁)に収める。

(校2) 楠本本は「未」を「木」に作る。

(校3) 楠本本は「今日」の前に「觀之」が入る。注(3)参照。

(1) 寒泉 寒泉精舍。乾道六年(一一七〇)春、朱熹は福建建陽の西に母祝氏を葬り、そのそばに寒泉精舍を建てる。ここで呂祖謙と『近思録』を編纂した。

(2) 務實 現実的なことに取り組む、着実に実践する。卷六〇・120条(一四四五頁)「蓋人之爲學、須是務實、乃能有進。若這裏工夫欠了些分毫、定是要透過那裏不得」。

(3) 復以書來 『文集』卷五〇「答周舜弼」第二書「臨行所說務實一事、途中曾致思否。觀之、今日學者不能進步、病痛全在此處。但就實做工夫、自然有得、未須遽責効驗也」。

『詩集伝』を授かつて以来、懸命に書き写していたところ、先生のお側でお教えを拝聴することが稀になつてしまつた。

朱子「君たちはここにやつて来ても、多くは書物に押し潰されてしまつて、逆に修養になつていない。どうして先ずはここに集まつて語り合わないのかね。そんなものはすべて紙の上の言葉に過ぎない。面と向かつて話をすれば、有益なことも多からう。」

さらにお尋ねになつた。

朱子「周茂元と同じ邸内に住んでいたそうだが、どんなことを議論したのかね。」

周謨「周宰は、先生の著述立言は内容が精密であり、これを手に入れたならば、熟読し深く考え、それに基づいて実践に努めてゆけば間違いはない、と申しております。」

朱子「周宰は、素質は非常に鋭敏なのだが、ただ些か粗略なところがあり、細かいところまで求めようとはしない。こういつたことは、口で言えばすぐに分かることだが、これを手紙に認めるならば、たとえ非常に明確に説明できたとしても、どうして面と向かつて議論して、一言半句ですぐにすつきり理解できるのと同じようにできようか。所謂「君と共に一夜話すは、十年の書を読むに勝る」というやつだ。もし透徹するまで話すとしたら、どうして十年の努力に止まらうか。」

既受詩傳、併力抄録、頗疏侍教。先生曰「朋友來此、多被冊子困倒、反不曾做得工夫。何不且過此說話。

彼皆紙上語爾。有所面言、資益爲多。」又問「與周茂元（茂元）同邸、所論何事。」曰「周宰云（宰）、先生著

書立言、義理精密。既得之、熟讀深思、從此力行、不解有差。」曰(校4)「周宰才質甚敏、只有些粗疏、不肯去細密處求、說此便可見。載之簡牘、縱說得甚分明(校5)、那似當面議論、一言半句、便有通達處。所謂共君一夜話、勝讀十年書(校6)。若說到透徹處(校6)、何止十年之功也。」(校7)

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五六五頁)に収める。

(校2) 楠本本は「茂元」を「元茂」に作る。

(校3) 楠本本は「曰、周宰云」を「以周宰所言對曰」に作る。

(校4) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校5) 楠本本は「甚分明」を「甚生分明」に作る。

(校6) 楠本本は「處」字を欠く。

(校7) 楠本本は本条末尾に「以上、並周謨自録。下見諸録。」の小字双行注が入る。

(1) 周茂元 未詳。周謨の一族か。下文では「周宰」と呼ぶが、「宰」は官名。県令の簡稱。

(2) 所謂共君一夜話、勝讀十年書 『遺書』卷二二上・6条(二七八頁)「先生曰、古人有言曰、共君一夜話、勝讀十年書。若一日有所得、何止勝讀十年書也」。同卷十八・66条(一九六頁)「古人云、共君一夜話、勝讀十年書。若於言下即悟、何啻讀十年書」。

周謨（以前、先生より）学問を知る以前は、人欲があることを知るだけで、天理があることは知らない。学問を知れば、「克己」の修養に力を注ぐことができる。とは言え、物事に対応する際、心が保たれ主となることができないと、心ここにあらず、気づいた時にはすでに間断してしまふ。だからこそ天理の現れを頼りに善の端緒を集めていけば、それなりのまとまりができてくる。……このようにお教えを承りましたが、実際の修養となるととても難しいものです。」

朱子「それも学ぶ者にとって当たり前のこと、顔子であつても間断が無いわけにはいかなかったのだ。いつもいつも自らを点検し、心を保ち守ることに力を注ぎ、動静どのような場面でも一定でいられるよう努めるならば、学問修養は自ずと間断なく連続する。」

周謨『『中庸或問』には、「誠」の意味は「実」であり、「誠は物の終始」は理の実（確かさ）から言つたもの、「誠ならざれば物無し」はこの心が実でなければという意味において言つたもの、とあります。心が保たれていなければ、行為に現れたことが理に悖つていなくとも、実ではない、というのは、正にこのことを言つたのでしょうか。」

朱子『『大学』の所謂「知至りてのち意誠なり」とは、必ず知が至つて（知識が蓄積され、道理を知的に探究する修養が十分になつて）、その後ではじめて意を誠にする（心の動きを誠実なものにする）ことができるということだ。それなのに今の学ぶ者たちは、「操存」（心をコントロールして保つ）ばかりを言つて、道理を探究することを知らないから、むしろ心を乱し朦朧としてしまつてゐる。それでどうやって「操存」

しようと言うのか。私は常々「誠意」の一節こそが聖人と凡人とを分ける肝要の關所と考えている。もし意を誠にすることができたならば、この難関を無事通り抜け、その後は大いなる川の流れのように自然に君子となつていく。そうでなければ、あつちによつかりこつちに躓き、結局は小人に行き着くだけだ。」

周謨「『大学』において「致知」が「誠意」に先立つのは、どういうことなのでしょうか。」

朱子「致知」とは、徹底的に知ることであり、とりわけ身にしみて切実に知らなければならぬ。ふつうは「知至る」の「至」を「尽す」の意味で解釈するが、近頃「切至」の「至」の意味で解釈すべきように思えてきた。切に知つてこそ、「誠意」の意味まで貫通できるので。程先生のいわゆる「真知」などが正にそれだ。」

問⁽¹²⁾「未知學問、知有人欲、不知有天理⁽¹⁾。既知學問、則克己⁽²⁾。工夫有著力處。然應事接物之際、苟失存主⁽³⁾、則心不在焉。及既知覺、已爲間斷。故因天理發見而收合善端、便成片段⁽⁴⁾。雖承見教如此、而工夫最難。」曰⁽⁵⁾「此亦學者常理、雖顏子亦不能無間斷⁽⁵⁾。正要常常點檢、力加持守、使動靜如一、則工夫自然接續。」問「中庸或問所謂⁽⁶⁾誠者物之終始、以理之實而言也。不誠無物、以此心不實而言也。謂此心存、則見於行事雖不悖理、亦爲不實、正謂此欺。」曰「大學所謂⁽⁷⁾知至意誠⁽⁸⁾者、必須知至、然後能誠其意也。今之學者只說操存⁽⁹⁾、而不知講明義理、則此心憤憤⁽¹⁰⁾、何事於操存也。某嘗謂誠意一節、正是聖凡分別關隘去處⁽¹¹⁾。若能誠意、則是透得此關後⁽¹²⁾、滔滔然自在、去⁽¹³⁾爲君子。不然、則崎嶇反側、不免爲小人之歸也。」曰「致知所以先於誠意者⁽¹²⁾、如何。」曰「致知者、須是知得盡、尤要親切。尋常只將知至之

至作盡字說、近來看得合是作切至⁽¹³⁾之至。知之者切、然後貫通得誠意底意思、如程先生所謂眞知⁽¹⁴⁾者是也。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五六四頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」を「謨問」に作る。

(校3) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校4) 楠本本は「則是透得此關後」を「則是透得此關透得此關後」に作る。

(校5) 楠本本は「去」を「此」に作る。

(1) 未知學問、知有人欲、不知有天理 卷十三・29条(二二五頁)「未知學問、此心渾爲人欲。既知學問、則天理自然發見、而人欲漸漸消去者、固是好矣。然克得一層、又有一層。大者固不可有、而纖微尤要密察」。記録者は同じく周謨。

(2) 克己 『論語』顏淵「顏淵問仁。子曰、克己復禮爲仁」。朱熹は「克、勝也。己、謂身之私欲也」と解釈する。

(3) 存主 心が「存」せられ、「主」となること。心が安定的に主体性を發揮すること。卷十二・141条(二一七頁)「今求此心、正爲要立箇基址、得此心光明、有箇存主處、然後爲學、便有歸着不錯」、卷一一八・40条(二八四七頁)「雖靜坐、亦有所存主始得」。

(4) 因天理發見而收合善端、便成片段 卷一一七・7条(二八〇八頁) 參照。

(5) 雖顔子亦不能無間斷 『論語』雍也「子曰、回也、其心三月不違仁、其餘則日月至焉而已矣」をめぐって、次のような顔回評価が見える。卷三一・14条(七八二頁)「顔子三月不違、只是此心常存、無少間斷。自三月後、却未免有毫髮私意間斷在。但顔子纔間斷便覺、當下便能接續將去。雖當下便能接續、畢竟是曾間斷來。若無這些子、却便是聖人也」。

(6) 中庸或問所謂『中庸或問』(章句二五章)「蓋誠之爲言、實而已矣。然此篇之言、有以理之實而言之、如曰誠不可掩之類是也。有以心之實而言之、如曰反諸身不誠之類是也。……所謂誠者物之終始、不誠無物者、以理言之」。

(7) 大學所謂『大學』(章句二五章)「蓋誠之爲言、實而已矣。然此篇之言、有以理之實而言之、如曰誠不可掩之類是也。有以心之實而言之、如曰反諸身不誠之類是也。……所謂誠者物之終始、不誠無物者、以理言之」。

(8) 知至意誠 『大学』(章句經一章)「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身修而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平」。

(9) 操存 『孟子』告子上「孔子曰、操而存、舍而亡、出入無時、莫知其鄉、惟心之謂與」。

(10) 憤憤 乱れている、紛擾している、ぼんやりしている、朦朧としている。卷十三・33条(二二六頁)「此心常常要惺覺、莫令須刻悠悠憤憤」、卷一〇四・7条(二六二二頁)「徒爲懶倦、則精神自是憤憤、只恁昏塞不通、可惜」。

(11) 誠意一節、正是聖凡分別關隘去處 卷十五・87条(二九九頁)「知至意誠、是凡聖界分關隘。未過此關、雖有小善、猶是黑中之白。已過此關、雖有小過、亦是白中之黑。過得此關、正好著力進步也」。

(12) 致知所以先於誠意者 『大学』(章句經一章)「……欲誠其意者、先致其知」。

(13) 切至 切衷で身に迫る。卷十八・6条(三九一頁)「致知是推極吾之知識無不切至。切字亦未精、只是一箇盡字底道理。見得盡、方是真實。如言喫酒解醉、喫飯解飽、毒藥解殺人。須是喫酒、方見得解醉人、喫飯方見得解飽人。不曾喫底見人說道是解醉解飽、他也道是解醉解飽、只是見得不親切。見得親切時、須是如伊川所謂曾經虎傷者一般」。

(14) 程先生所謂真知 虎の恐ろしさは、虎に襲われて怪我をした経験のある者以上には知り得ないという例を挙げて、「真に知る」ことの意味を程頤が説明した話。『遺書』卷一上・24条(一六頁)「真知與常知異。常見一田夫、曾被虎傷、有人切虎傷人、衆莫不驚、獨田夫色動異於衆。若虎能傷人、雖三尺童子莫不知之、然未嘗真知。真知須如田夫乃是。故人知不善而猶爲不善、是亦未嘗真知」。同卷十五・36条(一四七頁)、卷十八・25条(二八八頁)にも同様の話題が見える。

(8) 10条担当 松野敏之

【一一七・11(校一)】

舜弼(周謨)が書簡で仁について質問し、仁義礼智と性が形而上形而下に分れることに論及した。先生の返書は概ね次のようであった。

「仁の徳というのは、程子の五穀の種の譬えに言うように、愛の理である。愛は仁が発現した状態であり、

仁は愛がまだ発現しない状態である。このことを心得てこそ、はじめて（仁とは）天地万物が一体であることと言えるのだ。さもなければ（天地万物はそれぞれ）無関係になってしまう。仁義礼智は性の大きな項目であり、すべて形而上のものである。（形而上形而下の）二つに分けることはできない。」

このことに因んで言われた。

朱子「舜弼の学問は、もともと自分自身に切実に体得することがなく、あれこれ言葉を探して強引に言い繕うおうとするが、それも表面的なことしか言えない。」〔黄笛〕

舜弼⁽²⁾ 以書來問仁、及以仁義禮智與性分形而上下。先生答書⁽¹⁾ 略曰「所謂仁之徳、即程子穀種之説⁽³⁾、愛之理也。愛乃仁之已發、仁乃愛之未發。若於此認得、方可説與天地萬物同體⁽³⁾。不然、恐無交涉。仁義禮智、性之大目、皆形而上者。不可分爲二也。」因云「舜弼爲學、自來不切己體認、却只是尋得三兩字來撐拄⁽³⁾、亦只説得箇皮殼子。」〔笛〕

(校1) 楠本本は本条を一一四（一五六五頁）に収める。

(校2) 楠本本は「舜弼」を「周舜弼」に作る。

(1) 先生答書 『文集』卷五〇「答周舜弼」第五書「所論仁字、殊未親切、而語意叢雜、尤覺有病。須知所謂心之徳者、即程先生穀種之説所謂愛之理者則正。所謂仁是未發之愛、愛是已發之仁耳。只此意推之、更不須外邊添入道理、反混雜得無分曉處。若如此處認得仁字、即不妨與天地萬物同體。若不曾得

而便將天地萬物同體爲仁、却轉見無交涉矣。仁義禮智便是性之大目、皆是形而上者。不可分爲兩事。顏子之勇、只以曾子所稱數事、體之於身。非大勇者其孰能之。克己之說未爲不是。但如此言語上理會、恐無益耳。其他數條似皆未切。大抵前後見舜跖、講論多是不切已、而止於文字上捏合、所以無意味、不得力。須更就此幹轉、方有實地工夫也」。なお、本条の前提となつてゐるやりとりが卷二〇・111条（四七〇頁）に見える。記録者は周謨自身であり、末尾に「此一條、中間初未看得分明。後復以書請問、故發明緊切處兼載書中之語」と注が附せられている。

(2) 程子穀種之說 『遺書』卷十八・6条（一八三頁）「問、仁與心何異。曰、心是所主處、仁是就事言。曰、若是則仁是心之用否。曰、固是。若說仁者心之用、則不可。心譬如身、四端如四支。四支固是身所用、只可謂身之四支。四端固具於心、然亦未可便謂之心之用。或曰、譬如五穀之種、必待陽氣而生。曰、非是。陽氣發處、却是情也。心譬如穀種。生之性、便是仁也」。

(3) 天地萬物同體 『遺書』卷二上・17条（一五頁）「醫書言手足痿痺爲不仁、此言最善名狀。仁者以天地萬物爲一體、莫非己也。認得爲己、何所不至。若不有諸己、自不與己相干。如手足不仁、氣已不貫、皆不屬己」。

(4) 撐拄 ささえる。ここでは強引に言い繕つて自説を維持しようとする事。『文集』卷四六「答方耕道」第一書「大抵學問之道、不敢自是、虛以受人、乃能有益。若一有所聞、便著言語撐拄過去、則終無實得矣」。

【一一七・12 (校1)】

ある日舜弼(周謨)と一緒に屏山にお出かけになった。お帰りになって、山林がたいへん素晴しかったことを話された折、

朱子「山林は素晴しかったが、人の心は荒んでおった。」「李方子」

一日(校2)同舜弼(校3)遊屏山(1)歸、因説山園甚佳、曰「園雖佳、而人之志則荒矣。」「方子」

(校1)楠本本は本条を一一四(一五六五頁)に収める。

(校2)底本は「日」に作るが、楠本本・朝鮮整版に従い「一日」に改める。正中書局本は「日」の前に一字を欠く。

(校3)楠本本は「舜弼」を「周舜弼」に作る。

(1)屏山 朱熹が少年時代より長年暮らした崇安五夫里にある山。朱熹の最初の師劉子翬はその山麓に居を構えていたことから屏山先生と喚ばれた。

【一一七・13 (校1)】

質問「ふだん存養に努めている時に、心を喚起しようとすれば、気持ち切迫して長続きできません。か

といつて、少しでもこだわらないようにすると、又散漫になつて收拾がつかなくなつてしまいます。どのよ
うに努力すればよろしいのでしょうか。」

朱子「君はそもそもこだわらないようにできていないだけだ。」「以下、潘柄への訓戒。」

問「尋常於存養時、若擡起心、則急迫而難久。才放下^(一)、則又散緩而不收。不知如何用工方可。」曰「只
是君元不曾放^(校2)得下^(一)也。」「以下訓柄。」

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(校2) 朝鮮整版は「放」を「做」に作る。

(1) 放下／放得下 放つて置いて気にしない、こだわりや執着をすてる。卷十六・13条(三一七頁)「佛
氏也只是見箇物事、便放得下、所以死生禍福都不動、只是他去作弄了」、卷二九・23条(七三三頁)「陳
文字有馬十乘、亦是大家、他能棄而去之、亦是大段放得下了」、卷一一八・14条(二八三七頁)「蜚卿
云、某正爲心不定、不事科擧。曰、放得下否。曰、欲放下。曰、才說欲字、便不得。須除去欲字」。

【一一七・14 (校1)】

潘柄「人の心というものは、存していなければ亡^{うしな}われてしまうもので、存しても亡^{うしな}われてもいない時は

有り得ない。故にほんの一瞬でも反省を怠ると、亡失に沈んでしまい、しかもそのことに気づかない。天下の物事は、是でなければ非であり、是でも非でもない状態は有り得ない。故にほんのわずかな事でも精察に努めないでいると、悪に陥ってしまい、その自覚すらない。私は近頃このように理解していますが、いかがでしょうか。」

朱子「道理としてはそのとおりだが、少し学んだくらいですぐにそうはうまくいかない。」

問「凡人之心、不存則亡、而無不存不亡之時。故一息之頃、不加提省之力、則淪於亡而不自覺。天下之事、不是則非、而無不是不非之處。故一事之微、不加精察之功、則陷於惡而不自知。柄近見如此、不知如何。」
曰「道理固是如此、然初學後亦未能便如此也。」

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

【一一七・15 (校1)】

魏元寿(椿)が『大学』について質問した。

朱子「最近の学ぶ者たちがちゃんと文章を読めないのは、多くは先に自分勝手な考えを立てて、自説を主張しようとするからだ。それはただ聖人の言葉を借りてきっかけにし、そこに自説をつなぎ合わせて説こう

としているに過ぎない。弊害の根は専らこういったことにある。戒めねばならない。」

さらに、

朱子「最近ある学ぶ者がやって来て、「皇極」について議論しようとした。私はその者に説明させてみた
が、まったく的外れで、単に「大中」の意として説明するだけで、それ以上のことは言えなかった。孔孟以
後千數百年の間、書を読む者がまったく聖人の言葉について子細に考えようとしないうのは、いったい
どういふことなのだろうか。さらに言えば、人は一日のうち、自分勝手な考えや利害の算段ばかりをして、
ほんの少しでも心を読書に振り向けて、聖賢について考えようとしないう。それでこの世に在って何をしよ
うといふのか。」〔潘時挙〕〔魏椿への訓戒。〕

魏元壽問大學。先生因云「今學者不會看文章、多是先立私意、自主張己說。只借聖人言語做起頭、便自把
己意接說將去。病痛專在這上、不可不戒。」又云「近有一學者來、欲說皇極〔一〕。某令他說看、都不相近、只
做一箇大中字說了、便更無可說處。不知自孔孟以後千數百年間、讀書底更不仔細把聖人言語略思量看是如何。
且人一日間、此心是起多少私意、起多少計較、都不會略略回心轉意去看、把聖賢思量、不知是在天地間做甚
麼也。」〔時舉。○訓椿。〕

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(1) 皇極 『尚書』洪範。『尚書正義』に「皇大、極中也。凡立事當用大中之道」とある。朱熹は「皇

「極」を「大中」と解することを批判し、「皇」を人君、「極」を人君の示す規範と解する。卷七九・88
条（二〇四四頁）以降数条に議論がある。

【一一七・16（校）】

朱子「学ぶ者は根気が足りないと、書を読んで理解するにも、半分まで読んだだけで、もうその先には何もないと思ってしまう。」

吳必大「修養をやめなければ、さらに進むべき先があるのでですね。」

先生「先があるとわかるからこそ、修養に励むことができるのだよ。最近の学問する者には、たいてい二つの欠点がある。一つは、古の聖賢もこの程度だと思ってしまう、それゆえ修養に励まないこと。もう一つは、聖賢になんて成れないと自分で思い込み、それゆえ修養に励まないことだ。」〔以下、必大（吳伯豊）への訓戒。〕

「學者精神短底、看義理只到得半途、便以爲前面沒了。」必大曰「若工夫不已、亦須有向進。」曰「須知得前面有、方肯做工夫。今之學者、大概有二病。一以爲古聖賢亦只此是了、故不肯做工夫。一則自謂做聖賢事不得、不肯做工夫。」〔以下訓必大。〕

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

【一一七・17 (校1)】

お別れする際に、

朱子「話すべきことはほぼすべて話した。今後は時間を惜しんで努め、私の期待に伝えてくれ。」

さらに、

朱子「別れた後こそ、自分自身の努力のしどころだ。頑張って積み重ねてゆきなさい。今度会った時には、疑問点を出して議論しよう。その方が、頻繁にここに来て取組むよりよからう。」

拜違、先生曰「所當講者、亦略備矣。更宜愛惜光陰、以副願望。」又曰「別後正好自做工夫、**趨**〔↓〕積下。一旦相見、庶可舉出商量。勝如旋來理會。」

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(1) **趨** 集める、集まる、蓄積する。「攢」と同じ。

私（呉必大）が初めてお目見えした時、

必大「私は日頃『大学』の書を読むごとに、己の身にますます切実となり、一字一句がすべて自分自身のをさねばならぬ事であるように感じております。ただ、道理としてそのようにせねばならないのはわかっておりますが、自身の思慮や実践について当てはめて反省してみると、為すべきことができていないように思っています。やはり、これまでの己の心構えに、おざなりな点があったとしなければなりません。はじめは、気の習いや物欲による蔽いはすぐさま改めることはできないもので、少しづつ消してゆけばよいと思っております。しかし、病根が尽く取り除かれなければ、善を為し悪を去ろうとする際に枷となり、断乎として決することができなくなる、ということがわかっておりませんでした。心を保持して定めることを少しでも怠れば、中で隠れ伏していたものが往々にしてあれこれと起きあがり、覚えずして悪へと動く、といったことは本当に多くあります。そこで、かかる思念を一刀両断して、滞ることがないようにし、道理としてそうせねばならないところは、進んで行い逡巡してはならない、そうすれば、既往の過ちを補い、日に日にあらため正してゆくことができる、と考えます。いかがでしょうか。」

朱子「そうでなければいけない。」

必大「今までは子夏の「大徳」「小徳」の説（大きな徳について節度を越えなければ、小さな徳については多少の出入りがあっても構わない）に基づいて、大事については精察し、小事についてはいい加減にしておりました。徳が修まらないのは、まさしくこのためだったのです。張子（張載）は「少しの悪でも必ず除

いてこそ、善はそのまま性となる。悪を尽く察しなければ、善といえども粗雑である」と言っています。学
ぶ者はほんの少しもおざりにしないでこそ、徳が進むものと考えます。」

朱子「そのようにできれば、それ以上のことはない。小さな悪を問題無しとするのは、誠に間違いだ。」

必大初見、曰「必大日來讀大學之書、見得與己分上益親切、字字句句皆己合做底事。但雖見得道理合如此、
然反而躧括⁽¹⁾其慮踐履之間、却有未能如此者。蓋緣向來自待、未免有失之姑息處。始謂氣習物欲之蔽、
不能頓革、當以漸銷鑠之而已。不知病根未盡除、則爲善去惡之際固已爲之繫累、不能勇決。操存⁽²⁾少懈、
則其隱伏於中者往往紛起、而不自覺其動於惡者、固多有之。今須是將此等意思便與一刀兩斷、勿復凝滯、於
道理合如此處、便擔當著做、不得遲疑、庶可補既往之過、致日新⁽³⁾之功。如何。」曰「要得如此。」必大又
曰「向因子夏大德小德之說⁽⁴⁾、遂只知於事之次者致察、而於小者苟且放過。德之不修、實此爲病。張子曰⁽⁵⁾、
纖惡必除、善斯成性矣。察惡未盡、雖善必粗矣。學者須是毫髮不得放過、德乃可進。」曰「若能如此、善莫
大焉。以小惡爲無傷、是誠不可。」

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(1) 躧括 「躧括」とも表記する。竹木を矯正する道具、ためぎ。ここでは、『大学』を規範として自
己を正すこと。卷十三・160条(二四七頁)「做學業不妨、只是把他格式躧括自家道理、都無那追逐時好、

回避忌諱底意思、便好」。

(2) 操存 『孟子』告子上「孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其郷」。

(3) 日新 『大学』「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」。

(4) 大徳小徳之説 『論語』子張「子夏曰、大徳不踰閑、小徳出入可也」。集注「大徳小徳、猶言大節小節。閑、闌也。所以止物之出入。言人能先立乎其大者、則小節雖或未盡合理、亦無害也。○吳氏曰、此章之言、不能無弊。學者詳之」。

(5) 張子曰 張載『正蒙』誠明篇。

【一一七・19 (段)】

朱子「私は生涯多くの人と話してきた。文章が読めて明快に理解する者といえ、吳伯豊(必大)であった。この人ならば立派に成し遂げることがあるかと期待していた矢先、去年不意にその訃報が届いた。なんとも惜しいことだ。もう何年か生きていたならば、どれほど成長していたことか。伯豊は才氣があり、学問に努力し、官を守り政務を治めるにも皆な確乎たるやり方があった。」〔沈備〕

某一生與人説話多矣。會看文字、曉解明快者、却是吳伯豊。方望此人有所成就、忽去年報其死、可惜可惜。若稍假之年、其進未可量也。伯豊有才氣、爲學精苦、守官治事皆有方法。〔備〕

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(11) 19条担当 小池直

【一一七・20 (校1)】

朱子「呉伯豊(必大)はいい人物だったのに、先ごろ亡くなってしまった。惜しいことだ。私も大変気にかけていたし、まだまだ伸びていくことができたのだが。江西の万正淳(人傑)なども篤実であるが、ただ鈍いところがあつて、話をしていてもちつとも理解しない。」

そこでお尋ねした。

徳明「(先生の使われた)「伸びていくことができる」という言い方は、以前明道先生が使われた表現ですね。(孟子の所謂)「拡充」していくことができるということでしょうか。」

朱子「今のは、たまたま呉伯豊が自身の才能によつて、まだまだ伸びていくことができたろうと言つただ。彼は沈継祖と親戚だったが、このごろは事態の收拾に努め、屈しなかつたことは、評価すべきだ。」

〔廖徳明〕

「呉伯豊好箇人、近日死了、可惜。頗留意、也展托得開⁽¹⁾。江西如萬正淳亦純實、只是昏鈍、與他說、都會不得。」因問「展托得開、向來明道有此語、莫是擴充⁽²⁾得去否。」曰「適說呉伯豊、只是據他才也展托

得行。渠與沈⁽³⁾是親、近日力要收拾、它更不爲屈、可取。」〔徳明〕

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

(1) 展托得開 『二程外書』卷十二・38条(四二六頁)「明道初見謝語人曰、此秀才展托得開、將來可望」。この語は『上蔡語録』卷一にもみえる。また卷一一四・18条(二七五八頁)参照。

(2) 擴充 『孟子』公孫丑上「凡有四端於我者、知皆擴而充之矣、若火之始然、泉之始達」。

(3) 沈 沈繼祖。慶元二年(一一九六)に、朱熹を偽学の徒として弾劾している(『資治通鑑長編』卷一三〇等参照)。吳必大と万人傑とは沈繼祖と親類であったという。卷一〇七・23条(二六七〇頁)参照。

【一一七・21^(校1)】

朱子「どんな本を読んできたのかね。」

黄箇『論語』や『孟子』を読んできました。」

朱子「いま一つの書物を読むときには、一生懸命を尽して読み、聖賢の一字一句すべてに取り組んでいかなければならない。聖賢の言葉の脈絡はどこにあるのか、この一字一句はどのような道理なのか、聖賢は何を根拠にこのように言っているのか、ひたすら読み取らなければならない。ひたすら力を尽して取り組み、

まるで仇敵かたきに相對するかのよう^にに明確にしていき、その後でゆつくり玩味してこそ、はじめて全ての意味が分かるようになる。もしいい加減に読み過ぎして、これもいい、あれもいいというように読むばかりでは、結局は何ら得るものはないだろう。」「以下、黄芻への訓戒。」

問「嘗讀何書。」曰校2「讀語孟。」曰「如今看一件書、須是著力至誠去看一番、將聖賢說底一句一字都理會過。直要見聖賢語脈所在、這一句一字是如何道理、及看聖賢因何如此說校3。直是用力與他理會、如做冤讎相似、理會教分曉、然後將來玩味、方盡見得意思出來。若是泛濫看過校4、今次又見是好、明次又見是好、終是無功夫、不得力校5。」「以下訓箴。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五六七頁)に収める。

(校2) 楠本本は「曰」を「答」に作る。

(校3) 楠本本は「及看聖賢因何如此說」を欠く。

(校4) 楠本本は「泛濫看過」を「泛然」に作る。

(校5) 楠本本は「不得力」を欠く。

議論が、まるで一本の紐がまとわりついているようだね。だからすつきりせず、あの緻密で明白な感じがないのだ。もし本当にわかっているならば、一言半句で、はつきりと断ずることができる。

議論中譬如常有一條線子纏縛。所以不索性、無那精密潔白底意思。若是實見得、便自一言半句、斷得〔校₂〕分明。

(校₁) 楠本本は本条に類似する内容を卷一一三に収める。注※参照。

(校₂) 朝鮮整版・正中書局本は「得」を「當」に作る。

※卷一一五・1条(二七六九頁)に万人傑に対する訓戒として、本条と部分的に類似した表現が見える。同条は楠本本は卷一一三に収められている。「因語人傑曰、正淳之病、大概說得渾淪、都不曾嚼破殼子、所以多有纏縛、不索性、絲來線去、更不直截、無精密潔白底意思。若是實識得、便自一言兩語斷得分明」。

(20) 22条担当 阿部 亘

【一一七・23〔校₁〕】

先生が私(黄螢)と伯豊(吳必大)・正淳(万人傑)とにお尋ねになった。

朱子「これから何に努めるつもりかね。」

伯豊「まさにそれをお教えたいただきたいのです。『易』を先に読み、その後で『詩経』を読むのはいかがでしょうか。」

朱子「すでに『詩経』を読んだことがあるのなら、『詩経』を先にし『易』を後にした方がよからう。」
螢「私も『詩経』を読みたいと思います。」

朱子「『詩経』の読み方は、まずは虚心に熟読して探究すること、先人の解釈に囚われてはいけません。読み方が死んでしまふ。伊川（程頤）の『詩経』の解釈も、義理（詩の道義的意味）をいうことが多すぎる。詩とはもともとただそのように言ったというものに過ぎず、一章を言い終わると、次の章が続いてそれを詠嘆するというものの、義理がなくとも、味わい深いものなのだ。物の名称などに義理を見出そうとするべきではない。後世の人は往々『詩経』の言葉があのように平凡で淡々としているのを見て（経書として物足らなく思い）、ひたすらそこに義理を付け足し、結局これを窒息させてしまった。ちやうど滾々と湧く清水の源にひたすら物を積み上げて塞いでしまったようなものだ。私が諸儒の説を見たところでは、謝上蔡（良佐）の『詩経』は六義の形式さえ理解していれば、あとは詠い味わうだけでその真意は得られる」という言葉だけが、『詩経』の綱領と深く合致していて、余人の及ぶところではない。（『孟子』の）所謂「意を以て志を逆ぶ」の「逆ぶ」とは待ち受けるという意味である。詩の真意を得ぬうちは、ただ待つのみ、（『易』の）「酒食を需つ」と同じ意味だ。後世の人の『詩経』の読み方ときたら、こちらから出向いていってその真意を捉まえ、これを動かぬように縛り上げてしまふものだ。また呂祖謙の『詩記』は、『詩経』の一条について複数の説を収録し、逆にどれが正しいか定めない。「この説はこの詩の本意を述べてはいないが、これが落ち着いて当て

はまるところもあるので、いま全てここに記しておく」といった具合である。ちようど何でもありの人が来る者すべて可とするようなもの、所謂「人情の正しきを識るを要む」というようなものだ。そもそも『論語』に「詩は以て観るべし（『詩経』は、それを読むことによつて物事の得失を観察することができる）」とあるのは、『詩経』の中には得あり失あり、白あり黒ありであるからで、もしすべてが正しいことばかりであつたならば、むしろ「観るべき」無しだ。先ずは小序を後回しにして、経文を熟読するのが一番だ。一つの詩を手にしたとき、そこにかぐわしいこと、白いこと、寒時に開くことが詠われているのなら、小序の題目がなくともそれが梅花の詩であることは明白だ。毎日経書一種を読む外にも、『大学』『論語』『孟子』『中庸』の四書を、順番に繰り返し読むこと。だが、史書も読まなくてはいけない。『通鑑』だけを読んで、『通鑑』の記述は全般に冗長で、一つの出来事は一箇所にしか述べられておらず、別の箇所と参照しあうことができない。また編年体ゆえに、一連の出来事が時系列上に散在している。たとえ重大事件であつても、きっかけの出来事は小さく、後になって段々と重大になつてくるものだ。だから読者は初見ではそのきっかけの出来事に注意を払わないまま、ひたすら先へと読み進めてしまい、結局関連付けて覚えられないので、まずは一通り正史をざっと読んだ方がよい。正史にはそれぞれの人物の伝があり、その全体像を知ることができるし、また他の人物の伝と相互に参照できるので、覚えやすい。一代の正史を読み終わるたびに、『通鑑』を読むようにしなさい。また、綱目を作り、重大事件があれば某年に某事が起きたというように随時書き留め、『春秋』の経文のように記しなさい。温公（司馬光）にはまた『本朝大事記』があり、これは『稽古録』の最後に附されている。」

先生問營與伯豐正淳(校2)「此去(1)做甚工夫。」伯豐曰「政欲請教、先易後詩、可否。」曰(校3)「既嘗讀詩、不若先詩後易。」營曰「亦欲看詩。」曰「觀詩之法、且虚心熟讀尋繹之、不要被舊說粘定、看得不活。伊川解詩、亦說得義理多了。詩本只是恁地(校4)說話、一章言了、次章又從而歎詠之、雖別無義、而意味深長。不可於名物上尋義理。後人往往見其言只如此平淡、只管添上義理、却塞塞了他。如一流清水、只管將物事堆積在上、便壅隘了。某觀諸儒之說、唯上蔡云(2)詩在識六義體面、却諷味以得之、深得詩之綱領、他人所不及。所謂以意逆志(3)者、逆、如迎待之意。若未得其志、只得待之、如需于酒食(4)之義。後人讀詩、便要去捉將志來、以至束縛之。呂氏詩記(5)有一條收數說者、却不定。云、此說非詩本意、然自有箇安頓用得他處、今一概存之。正如一多可的(校5)人、來底都是、如所謂要識人情之正(6)。夫詩可以觀(7)者、正謂其間有得有失、有黑有白、若都是正、却無可觀。今不若且置小序于後、熟讀正文(校6)。如收得一詩、其間說香、說白、說寒時開、雖無題目、其爲梅花詩必矣。每日看一經外、大學論語孟子中庸四書、自依次序循環看。然史亦不可不看。若只(校7)看通鑑、通鑑都(校8)是連長記去、一事只一處說、別無互見、又散在編年。雖是大事、其初却小、後來漸漸做得大。故人初看時不曾著精神(校9)、只管看向後去、却記不得、不若先草草看正史一過。正史各有傳、可見始末、又有他傳可互攷者、所以易記。每看一代正史訖、却去看通鑑。亦須作綱目、隨其大事節記某年有某事之類、準春秋經文書之。溫公亦有本朝大事記、附稽古錄後(校8)。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五六七頁)に収める。

(校2) 楠本本は「伯豐正淳」を「二友」に作る。

(校3) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校4) 底本は「恁地」を「恁他」に作るが、楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本に従つて改めた。

(校5) 楠本本・正中書局本は「的」を「底」に作る。

(校6) 楠本本は「正文」を「正文爲善」に作る。

(校7) 楠本本は「只」を「且」に作る。

(校8) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「都」を「却」に作る。

(校9) 楠本本は「神」を「伸」に作る。

(1) 此去 今後、これから。「去」は「後」の意味。卷一一五・41条(二七八一頁)「今先須養其源、始得。此去且存養、要這箇道理分明常在」。卷一一九・4条(二八六六頁)「方云、此去欲看論語如何」。

(2) 上蔡云 『上蔡語録』卷中「曾本云、問、學詩以何爲先。云、先識取六義體面。又問、莫須於小序中求否。云、小序亦不盡。更有詩中以下句證上句。不可泥訓詁、須諷咏以得之、發乎情性、止乎禮義」。

卷八〇・23条(二〇七一頁)「若上蔡怕曉得詩、如云讀詩須先要識得六義體面。這是他識得要領處」。

(3) 以意逆志 『孟子』万章上「故說詩者、不以文害辭、不以辭害志。以意逆志、是爲得之」。『集注』「當以己意迎取作者之志、乃可得之」。卷十一・30条(一八〇頁)「逆者、等待之謂也。如前途等待一人、未來時且須耐心等待、將來自有來時候。他未來、其心急切、又要進前尋求、却不是以意逆志、是意捉志也。如此只是牽率古人言語、入做自家意中來、終無進益」。

(4) 需于酒食 『易』需卦九五。卷七〇・39条(二七四九頁)「需只是待。當此之時、別無作爲、只有

簡待底道理」。

(5) 呂氏詩記 呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』。卷一「條例」に「諸家先後、以經文爲序。或一章首用甲說、

次用乙說。末復用甲說、則再出甲姓氏」とある。

(6) 所謂要識人情之正 「所謂」とあるが、典拠未詳。

(7) 詩可以觀 『論語』陽貨「子曰、小子、何莫學夫詩。詩可以興、可以觀、可以群、可以怨」。『集注』「考見得失」。

(8) 温公亦有本朝大事記、附稽古録後 北宋・司馬光撰。『稽古録』末尾に「右臣於神宗皇帝時所進、國朝百官公卿表大事記」とある。卷十一・133条(一九五頁)「問讀史之法。曰、先讀史記及左氏、却看西漢東漢及三國志。次看通鑑。温公初作編年、起於威烈王、後又添至共和後、又作稽古録、始自上古。然共和以上之年、已不能推矣。……温公於本朝又作大事記。若欲看本朝事、當看長編」。

(23条担当 江波戸 互)

【一一七・24 (校下)】

先生が私(黄螢)と二人の友人とに質問した。

朱子「君たちは以前一緒に『易伝』を読んでいたが、どのようによくて、どこが肝要なのか分かったのかね。気に入ったのかどうか、気に入ったとすればどこが気に入ったのかね。」

私たちは各おの自分の考えを述べた。

朱子「そんなふうでは、ただ漫然と拾い読みをしているだけで、本当に味わうことはできていない。この書が読みづらいのは確かだ。様々な社会経験を経て、人情や物事の道理に精通してこそ深く読むことができるのだ。思うに、この書は淡々と書かれていて、書かれていることはすべてまだ現実にはないことだ。君主への仕え方や、事変や困難に対処することを述べた箇所などは、すべてまだ実際に遭遇したことではないのだから、読んでも味わいがないことは当然だ。つまり書かれている範囲が広く遠大で、まだ起こっていないことがあらかじめ含まれているのだ。学ぶ者はまず『詩経』や『書経』その他の経書を読み、それなりの見識ができて、さらにそういった経験を経てはじめてこの書を読むことができるのであり、そのときには無味の味を知ることができなのだ。初学者がいきなり読めるものではない。私は折に触れて『易伝』を読んだ人に質問してみたが、たいてい誰も理解できていなかった。この書がどれほど読みづらいかがわかるだろう。『論語』に載せられているのは、すべて親への仕え方や友人の求め方や郷里での身の処し方など、今すぐ役に立つことばかり、孔子の言葉はすべて学ぶ者の目の前にある現実の事柄に対応している。『孟子』は章ごとの冒頭に主旨を述べ、その後それに注釈を付けるように書かれている。『大学』はというと、はじめの三句（「明明徳」「新民」「止於至善」）が、「致知」「格物」以下の一段の綱目を統括し、また「明徳を明らかにせんと欲すれば」以下の一段も、伝中の多くのことを統括している。それはまるで鎖状の骨のように、互いに連環していて、ちよつと要となるところを持ち上げれば、すぐにすべてを統括できるのだ。だから学ぶ者には先ずはこういった二、三の書を読ませているのだ。『易伝』となるとにわかに要点を取り出すことが

できなくなる。つまりそこに書かれている道理は広大で数が多く、伊川自身が明らかにしたところと経文との間にも皮一枚隔てたような違いがあるので、読者は全体としての一貫性を見出すことができないのだ。孔子が『易』の「伝を作ったときには、「元亨利貞」の解釈はすでに文王の彖辞と異なっていたし、伊川の説も経文とぴったり重なり合うものではない。読者は文王の解釈は文王のものとし、孔子の解釈は孔子のものとし、伊川の解釈は伊川のものとするべきなのだ。まして『易』の中に書かれている事物は譬喩であつて、実際のものを指して言っているのではないのだから、分かりづらいのは言うまでもない。だから伊川はそこにまた別の道理を読もうとしたのだ。いま先ずは経文の本来の意味を理解しなければならぬ。そうすれば、程子の『易伝』を読んだとしても、「門扇に白無し。（その心は）回して動かせない（軸になるものが無く、展開できない）」という事態には陥るまいが、やはり度量が広く、世事にたけた者でなければ読みこなすことはできないだろう。だいたい『易伝』のよいところは、言葉が端正で、実に精密、少しも過激なところがないことであつて、他の書が抑揚に富んでいて、読者を発奮させやすいのとは異なっている。上蔡（謝良佐）の『論語解』などは、道理の解釈は不十分にもかかわらず、多くの人が愛読している。それは正にその説に過激なところがあり、人を啓発し、読者が入り込みやすいからなのだ。それに対して程子の『易伝』などは、抑揚に乏しく、ほとんど人を驚かすこともないから、深く道理に通じた者でなければ容易には読むことはできないのだ。」「万人傑の記録は省略。『易』に関する箇所に見える。」

先生問管及二友^{〔一〕}。「俱嘗看易傳、看得如何^{〔二〕}。是好。何處是緊要。看得愛也不愛^{〔三〕}。愛者是愛他甚處。」

營等各對訖。先生曰「如此、只是鶻盧⁽³⁾提看、元不曾實得其味。此書自是難看、須經歷世故多、識盡人情物理、方看得入。蓋此書平淡、所說之事、皆是見今所未嘗有者。如言事君處及處事變患難處、⁽⁴⁾皆未嘗當著、可知讀時無味。蓋他說得闊遠、未有底事、預包在此⁽⁵⁾。學者須讀詩書他經、⁽⁶⁾有個見處、及曾經歷過⁽⁷⁾。此等事、方可以讀之、得其無味之味、此初學者所以未可便看。某屢問讀易傳人、往往皆無所得、可見此書難讀。如論語所載、皆是事親取友居鄉黨、目下便用得者、所言皆對著學者即今實事。孟子每章先言大旨了、又自下注脚。大學則前面三句總⁽⁸⁾盡致知、格物而下一段綱目欲明明德以下一段、又摠括了傳中許多事。一如鎖子骨⁽⁹⁾、才提起、便摠統得來。所以教學者且看二三書。若易傳、則卒乍裏面無提起處。蓋其間義理闊多、伊川所自發、與經文又似隔一重皮膜、所以看者無個貫穿處。蓋自孔子所⁽¹⁰⁾傳時、解元亨利貞已與文王之詞不同、伊川之說又⁽¹¹⁾與經文不相著。讀者須是文王自作文王意思看、孔子自作孔子意思看、伊川自作伊川意思看。況易中所言事物、已是譬喻、不是實指此物而言、固自難曉。伊川又別發明出義理來。今須先得經文本意了、則看程傳、便不至如門扇無臼、轉動不得⁽¹²⁾。亦是一箇大底胸次、識得世事多者、方看得出。大抵程傳所以好者、其言平正、直是精密、無少⁽¹³⁾過處、不比他處⁽¹⁴⁾有抑揚、讀者易發越。如上蔡論語⁽¹⁵⁾、義理雖未盡、然人多喜看、正以其說有過處、啓發得人、看者易入。若程傳、則不見其抑揚、略不驚人、非深於義理者未易看也。」〔人傑錄略、見易類⁽¹⁶⁾。〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五六七頁)に収める。

(校2) 楠本本は「看得如何」を「看得他如何」に作る。

- (校3) 楠本本は「皆」の前に「今」が入る。
- (校4) 楠本本は「預包在此」を「預包載在此」に作る。
- (校5) 楠本本は「有」の前に「自」が入る。
- (校6) 楠本本は「此等事」の前に「前件」が入る。
- (校7) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「總」を「摠」に作る。以下同じ。
- (校8) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「所」を「作」に作る。
- (校9) 楠本本は「與」の前に「自」が入る。
- (校10) 楠本本・朝鮮整版は「少」を「小」に作る。
- (校11) 楠本本・朝鮮整版は「處」を「書」に作る。
- (校12) 楠本本は末尾の小字注を欠く。
- (1) 先生問答及二友 前条参照。「二友」は呉必大と万人傑か。
- (2) 愛也不愛 「也」は肯定と否定や、相反する語の間に置き、選択疑問の働きをする助字。
- (3) 鶴盧 「鶴突」と同義か。あいまいに、いい加減に。
- (4) 鎖子骨 鎖のように相連環する骨。
- (5) 門扇無臼、轉動不得 未詳、歇後語か。「扇状のとびらに臼(あな、或いは芯や軸)が無い」、その心は「(とびらを回して)開けられない」、即ち軸となるものがないので自在に展開できない、という意味か。

(6) 上蔡論語 謝良佐には『論語解』がある。卷十九・90条(四四二頁)、卷一一五・41条(二七八三

頁) 参照。

(7) 人傑録略、見易類 卷六七・20条(一六五〇頁) 参照。

(24条担当 梶田 祥嗣)

【一一七・25(段)】

私(陳淳)は冬至にお手紙と自警の詩を持って先生に面会を求めた。翌日、郡齋に入り、修養の大意について質問した。

朱子「学問はもちろん読書にこそあるが、とはいえ読書にだけあるのではない。君の詩は非常にいいもので、これまでの努力が窺われるが、それでは何をその要かなとしているのか。要となるものがあれば、(君の詩の)三十五章も一つに貫くことができる。もしすべてが要だと言うならば、端緒が多くなり過ぎて、まるで東西南北どちらの方面にも賊の侵攻を防ぐようなことになってしまう。」

陳淳「私ごときの考えにては、ほど良く中庸を得ることができません。何卒先生にお教えいただきたく存じます。」

朱子「ふだんはどのような修養をしているのかね。」

陳淳「ただ自分の身の上において修めているだけです。」

朱子 「では自分の身の上でどのように修養しているのだね。」

陳淳 「日常の中で天理と人欲の弁別に努めるばかりです。」

朱子 「どのように弁別しているのかね。」

陳淳 「天より授かった不変の良心に即して弁別しております。」

朱子 「(良心だけが心なのではない) どうして発するところすべて心でないことがあるのか。ここで話をしているのも心、向かい合って座っているのも心、動作をするのも心、心でないものがあるのか。では、真つ先に取り組むべき肝要のところはどこであろうか。」

先生は再三お尋ねになった。私は考えたが、お答えできずにいると、先生が縷々お話し下さった。

朱子 「およそ道理を考えるには、その因つて来たる根源を窮めなければならない。例えば、人の父としてはなぜ「慈に止まる」なのか、人の子としては、なぜ「孝に止まる」なのか、人君人臣としてはなぜ「仁に止まる」「敬に止まる」なのか。孝について言えば、この孝の因つて来たる根源のところを窮めなければならぬ。慈について言えば、この慈の因つて来たる根源のところを窮めなければならず、仁や敬もまた同様だ。道理はすべて因つて来たる根源のところから窮めてこそ、理解が確かなものになるのであつて、私は修養して実践していますと言つてそれで済ませてしまふわけにはいかない。行いを謹み守る資質の優れた人士を多く見かけるが、もちろんそれはそれでよいことではある。しかし彼らは道理を議論する段になると、自分の見解に固執してしまい、自ら一門戸を立てて、頑固に動けなくなつてしまふのは、やはり大いに憂慮すべきことだ。本当に道理を理解しようとするならば、その表裏や首尾を余すところ無く考えて、絶対にそ

うであり、決して他のものには換えられないと本當に分かるまで徹底しなければならない。ほんの一部を理解しただけで、それでよしとしてはいけないのだ。人の父としては、絶対に「慈に止まる」であつてそれ以外はありえないと心底知り、人の子としては、絶対に「孝に止まる」であつてそれ以外はありえないと心底知らなければならぬ。善ならば、心底善であると分かつてこそ決然として必ず行うようになり、悪ならば、心底悪であると分かつてこそ決然として絶対に行わなくなる。よくない文章を読めば、もちろんよくないことは分かるだろうが、必ず自分で本當によくないと実感しなければならぬし、よい文章はもちろんよいものだが、自分で本當によいと実感しなければならぬのだ。聖賢の言葉も、徹底的に読み、彼らの肚の中を通り抜けて出て来るかのような感覚で、一字の軽重とて動かせないことが実感できてこそよいのだ。理を徹底的に了解すれば、自分と理とは一つになる。とはいへ、すぐさま徹底的に了解することはできないから、じっくり染み込み行き渡るようにさせなければならぬ。道理というものは非常に生き活きとしていて、その本体は渾然、内は燦然と輝いている。数千年にわたり、確かに天地の間に明々白々と存在し、聖人たちが代々伝えてきたものであるから、絶対で疑いようのないものなのだ。孔夫子が教えたのもこれに他ならないし、顔子が楽しんだというのもこれを楽しんだのだ。捉えどころのないものは捉えどころのないままに、直截なもの直截なままに（道理というものは自在に存在する）。『孟子』の中で伊尹がいった「先に知った者が後に知る者を覚らせ、先に覚つたものが後に覚るものを覚らせる」というのも、これを覚らせるのだ。」

陳淳「顔子の楽しみとは、道理という天地の間で最も豊かで最も尊いものを楽しんだということだと存じます、このような楽しみを私たちも求めることができるのでしょうか。」

朱子「それは違う。そういうことはすぐにわかるものではない。万理を窮め尽して、徹底してからでなければだめだ。」

しばらくして、

朱子「程子は「この身を万物の中に置いてひとしなみに見る、なんと爽快なことか」、「人は天地の間にあつて何も隔てられるものはない、なんと爽快なことか」と言っている。これが顔子の楽しみだ。この道理は天地の間に在る。真に窮め至り、どんなに微細なものでも余すところ無く十分に透徹すれば、万物と一つになつて、何者にも隔てられず、胸中は泰然、どうして楽しまないことがあるうか。」

「以下、陳淳への訓戒。饒録は五段落に作る。」

淳冬至以書及自警詩爲贄見⁽¹⁾、⁽²⁾翌日入郡齋⁽³⁾、問功夫大要⁽⁴⁾。曰⁽⁵⁾「學固在乎讀書、而亦不專在乎讀書。公詩甚好、可見亦曾用工夫。然以何爲要。有要則三十五章⁽³⁾可以一貫。若皆以爲要、又成許多頭緒、便如東西南北禦寇一般⁽⁷⁾。」曰⁽⁸⁾「晚生妄意⁽⁴⁾、未知折衷⁽⁹⁾、惟先生教之。」先生問「平日如何用工夫。」曰「只就已上用工夫。」⁽¹⁰⁾「己上如何用工夫。」曰「只日用間察其天理人欲之辨。」⁽¹¹⁾「如何察之。」曰「只就秉彝⁽⁵⁾、良心處察之。」曰「心豈直是發。莫非心也。今這裏說話也是心、對坐也是心、動作也是心⁽¹²⁾。何者不是心。然則緊要著力在何處。」扣之再三、淳思未答。先生縷縷言曰「凡看道理、須要窮箇根原來處⁽⁶⁾。如爲人父、如何便止於慈。爲人子、如何便止於孝。爲人君、爲人臣、如何便止於仁、止於敬⁽⁷⁾」⁽¹³⁾。如論孝、須窮箇孝根原來處。論慈、須窮箇慈根原來處。仁敬亦然。凡道理皆從根原來處⁽¹⁴⁾。

窮究(段15)、方見得確定、不可只道我操修踐履便了。多見士人有謹守資(段16)、質好者、此固是好。及到講論義理、便偏執(段17)己見、自立一般門戶、移轉不得、又大可慮(段18)。道理要見得真(段19)、須是表裏首末、極其透徹、無有不盡。真見得是如此、決然不可移易、始得。不可只窺(段20)見一斑半點(段21)、便以爲是。如爲人父、須真知是決然止於慈而不可易。爲人子、須真知是決然止於孝而不可易。善、須真見得是善、方始決然必做。惡、須真見得是惡、方始決然必不做。如看不好底文字、固是不好、須自家真見得是不好。好底文字固是好、須自家真見得是好。聖賢言語、須是真(段22)看得十分透徹、如從他肚裏穿過、一字或輕或重移易不得、始是。看理徹、則我與理一。然一下未能徹、須是淡洽始得。這道理甚活(段23)其體渾然、而其中粲然。上下數千年、真是昭昭在天地間、前聖後聖相傳、所以斷然而不疑。夫子之所教者、教乎此也。顏子之所樂(段24)、樂乎此也。圓轉(段25)處儘圓轉、直截處儘直截。先知所以覺後知、先覺所以覺後覺(段26)。問(段27)「顏子之樂、只是天地間至富至貴底道理樂去。樂可求之否。」曰「非也。此一下未可便知、須是窮究萬理、要令極徹。」已而曰「程子謂(段28)將這身來放在萬物中一例看、大小大快活。又謂(段29)人於天地間並無窒礙處、大小大快活。此便是顏子樂處。這道理在天地間、須是真窮到底、至纖至悉、十分透徹(段30)、無有不盡。則與萬物爲一、無所窒礙、胸中泰然、豈有不樂。」〔以下訓淳。饒錄作五段(段31)。〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七七頁)に収める。

(校2) 楠本本は「見」の後に「先生」が入る。

(校3) 楠本本は「日」の後に「延」が入る。

(校4) 楠本本は「問功夫大要」を欠き、以下が入る。「與語曰、某諭分到此恨識面之。晚淳起稟曰、淳年齒壯長蹉跎無立仰視聖賢、大有愧心。今日初侍未知所以爲問。望先生指示其功夫要處」。

(校5) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校6) 楠本本は「可見亦」を「可見其志亦是」に作る。

(校7) 楠本本は「一般」の字を欠く。

(校8) 楠本本は「晩生」の前に「淳」が入る。

(校9) 楠本本は「衷」を「裏」に作る。

(校10) 楠本本は「己上」の前に「曰」が入る。

(校11) 楠本本は、「如何」の前に「曰」が入る。

(校12) 楠本本は、「動作也是心」を欠く。

(校13) 楠本本は、「爲人君、爲人臣、如何便止於仁、止於敬」を「爲人君、如何便止於仁、爲人臣、如何便止於敬」に作る。

(校14) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本は、「處來」を「來處」に作る。

(校15) 楠本本は「窮究」を「尋究」に作る。

(校16) 楠本本は、「資」の字を欠く

(校17) 楠本本は、「便偏執」を「便是執」に作る。

(校18) 楠本本は、「可慮」の後に「也」が入る。

(校19) 楠本本は、「真」を「直」に作る。

(校20) 楠本本は、「窺」の字を欠く。

(校21) 楠本本は、「真」の字を欠く。

(校22) 楠本本は、「其」の前に「而」が入る。

(校23) 楠本本は、「透徹」を「洞徹」に作る。

(校24) 楠本本は、「饒録作五段」を欠く。

(1) 淳冬至以書及自警詩爲贄見 陳淳入門時の経緯については田中謙二『朱門弟子師事年攷』(一三四頁)に紹介がある。「書」は『北溪大全集』卷五「初見晦庵先生書」、「自警詩」は同卷一「隆興書堂自警三十五首」。

(2) 郡齋 郡守の居所、郡の役所。この時(紹熙元年、一一九〇年)、朱熹は臨漳(漳州)に赴任。陳淳は漳州龍溪の人。

(3) 三十五章 陳淳の「自警詩」は三十五首から成っていた。(1)参照。

(4) 晩生妄意 いずれも謙讓の表現。「晩生」は年長者に対する年少者の自称。「妄意」は卑見、拙論の意。

(5) 秉彝 『詩経』大雅・烝民「民之秉彝、好是懿德」。『孟子』告子上にも引用されている。

(6) 根源來處 本卷26条・27条・29条参照。

(7) 爲人父如何便止於慈。『大学』(章句伝三章)「爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國人交、止於信」。

(8) 一斑半點 一部分、ほんのわずかばかり。卷六七・163条(二六七八頁)「今學者須貴於格物。格、至也。須要見得到底。今人只是知得一斑半點、見得些子、所以不到極處也」。

(9) 顏子之所樂 『論語』雍也「子曰、賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改其樂。賢哉、回也」。卷三一・55条(七九四頁) 以下数条参照。

(10) 圓轉 融通無碍の、婉曲な、(人柄などが) まるい。卷二二・49条(四九一頁)「明道之語、周於事物之理、便恁地圓轉。伊川之語嚴、故截然方正」、卷一一五・41条(二七八一頁)「久自有覺、覺後自是此物洞然通貫圓轉」。

(11) 先知所以覺後知、先覺所以覺後覺 『孟子』万章下「天之生斯民也、使先知覺後知、使先覺覺後覺」。

(12) 問、顏子之樂。以下最後までと同文が、卷三一・59条(七九五頁)にも見える。記録者は陳淳。

(13) 程子謂。『遺書』卷二上・135条(三三三頁)「所謂萬物一體者、皆有此理、只爲從那裏來。生生之謂易、生則一時生、皆完此理。人則能推、物則氣昏、推不得、不可道他物不與有也。人只爲自私、將自家軀殼上頭起意、故看得道理小了侘底。放這身來、都在萬物中一例看、大小大快活」。

(14) 又謂。『遺書』卷十五・71条(一五二頁)。

(25条担当 宮下 和大)

【一一七・26 (校1)】

質問「日常生活において、さしあたりどのような修養すればよろしいでしょうか。」

朱子「大綱は以前に話した通りである。因って来たる根源のところを突きつめ、それを徹底して理解しようとするのだ。また、『易』にいう「敬以て内を直にし、義以て外を方にす」ることが必要だ。この二句は緊要のところだ。」

問「日用間今且如何用工夫。」曰「大綱只是恁地。窮究根原來處⁽¹⁾、直要透徹。又且須敬以直内、義以方外⁽²⁾。此二句爲要。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七七頁)に収める。

(1) 根原來處 本卷25条・27条・29条参照。

(2) 敬以直内、義以方外 『易』坤卦・文言伝「君子敬以直内、義以方外。敬義立而徳不孤」。

【一一七・27 (校1)】

朱子「『中庸』の「善を択んで固く之を執る」で言えば、『大学』の「致知」「格物」は「善を択ぶ」に当たり、「誠意」「正心」「修身」は「固く之を執る」に当たる。つきつめればこの二つに収約されるのだ。」

私（陳淳）は、南軒（張栻）の「知と行とは互いに促し合う」という語を取り上げた。

朱子「知と行とは同時に取り組んでこそ、互いに促し合うことが可能となるのだ。程子が「涵養には須らく敬を用ふべし、進学は則ち致知に在り」と言っているが、「須（すべからくべし）」や「在（〜にあり）」という字を使っているのは、同時に取り組むべきことを言うのであって、知らないうちは行なうことはできないと言うことはできないのだ。きわめて聡明で知ることではあるが、行なうことができないタイプの人がいる。これは性質が軟弱だからである。また、すこぶる行なうが知ることのできないタイプの人もいる。」そこで質問した。

陳淳「わたしは性格が臆病で弱く、行なおうとする気持ちがいとも知ることよりも後回しになってしまい、己に克つにも厳しさに欠け、道に進むにも勇敢さに欠けてしまいます。どうすれば厳しく勇敢になれるのでしょうか。」

朱子「大綱はいつも言っていることに尽きる。因って来たる根源のところを徹底的に理解できれば、そういったことは自ずとすべて解決する。」

「擇善而固執之⁽¹⁾、如致知格物⁽²⁾、便是擇善。誠意正心修身⁽³⁾、便是固執。只此二事而已。」淳⁽⁴⁾ 舉南軒謂⁽⁵⁾ 「知與行互相發⁽³⁾。」曰⁽⁴⁾ 「知與行須是齊頭做、方能互相發。程子曰、涵養須用敬、進學則在致知⁽⁴⁾、下須字在字、便是皆要齊頭著力、不可道知得了⁽⁵⁾、方始行。有一般人儘聰明、知得而行不及⁽⁶⁾、是資質弱。又有一般人儘行得而知不得。」因問「淳⁽⁷⁾ 資質懦弱、行意常緩於知⁽⁸⁾、克己不嚴、進道不勇。

不審何以能嚴能勇。」曰「大綱亦只是適間所說。於那根原來處⁽⁵⁾真能透徹、這箇自都了。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七七頁)に収める。

(校2) 楠本本は「淳」の後ろに「因」が入る。

(校3) 楠本本は「謂」の字を欠く。

(校4) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校5) 楠本本は「了」の後に「後」が入る。

(校6) 楠本本は「及」を「得」に作る。

(校7) 楠本本は「淳」を「某」に作る。

(校8) 楠本本は「知」の字を欠く。

(1) 擇善而固執之 『中庸』(章句二十章)「誠者天之道也。誠之者、人之道也。誠者、不勉而中、不思而得、從容而中道、聖人也。誠之者、擇善而固執之者也」。

(2) 致知・格物／誠意・正心・修身 いずれも『大学』八条目の一つ。

(3) 南軒謂知與行互相發 張栻『南軒集』卷十五「送鍾尉序」に「大學之云道學、猶言致知也。而云自脩、則力行也。致知力行、互相發也。蓋致知以達其行、而力行以精其知、工深力久、天理可得而明、氣質可得而化也」とある。また、同卷一四「論語說序」参照。このような張栻の知行論に対しては、本条のように肯定的に捉える一方で、卷九・5条(一四八頁)に「問、南軒云致知力行互相發。曰、未須理

會相發、且各項做將去。若知有未至、則就上理會、行有未至、則就行上理會、少間自是互相發。今人知不得、便推說我行未到、行得不是、便說我知未至、只管相推、沒長進」と、慎重な見方もなされる。

(4) 程子曰、涵養須用敬、進學則在致知 『遺書』卷十八・28条(二八八頁)「涵養須用敬、進學則在致知」。

(5) 根原來處 本卷25条・26条・29条参照。

【一一七・28 (校し)】

質問 「静坐をして書物を読んでいる時には、道理がしつくりと滲みわたってゆくように感じられますが、物事を行う段になりますと、道理がよそよそしく感ぜられてなりません。どういうことなのでしょう。か。」

朱子 「まだ熟していないということだ。」

問 「静坐觀書、則義理浹洽。到幹事後、看義理又生、如何。」曰 「只是未熟。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七八頁)に収める。

(1) 義理又生 卷八・110条(一四三頁)「道理生、便縛不住」。

質問「道理を考えるには、因つて来る根源のところを探求しなければならぬということですが、それは性のレベルで考えるということなのででしょうか。」

朱子「どういふことだね。」

質問「『中庸』にいう「天命の性」には、あらゆる理が完全に備わっています。それを大目としてまとめると仁義礼智となりますが、その中にはさらに数多くの善に区別されます。大綱はこれに尽きますが、その中についても一つ一つ徹底していかなければなりません。」

朱子「もちろんその通りだが、さらに性が何に由来するのかを考えなければいけない。」

質問「最初、天地の間にはもともと渾然たる道理があつたのを、人が生まれると同時にそれぞれ分与されたもの、それが性なのだと思います。」

朱子「性とは理に他ならず、あらゆる理の総称なのである。この理はまた天地の間の公共の理に他ならないが、それが分与されると、自分のものとなるのだ。「天が命ずる」というのは、朝廷が人を官職に任命するようなものである。性は官職のようなもので、官職にはそれに相当する職務があるのだ。」

問「看道理、須尋根原來處⁽¹⁾、只是就性上看否。」曰「如何。」曰「天命之性⁽²⁾、萬理完具。總其大目、則仁義禮智、其中遂分別成許多萬善。大綱只如此、然就其中須件件要徹。」曰「固是如此、又須看性所因^(校2)是如何。」曰「當初天地間元有這箇渾然道理、人生稟得便是性。」曰「性只是理、萬理之總名⁽³⁾。此理亦只

是天地間公共之理⁽⁴⁾、稟得來便爲我所有。天之所命、如朝廷指揮差除人去做官。性如官職、官便有職事⁽⁵⁾。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七八頁)に収める。

(校2) 楠本本は「因」を「固」に作る。

(1) 根原來處 本卷25条・26条・27条参照。

(2) 天命之性 『中庸』(章句首章)「天命之謂性」。

(3) 性只是理、萬理之總名 卷五・68条(九二頁)「性是理之總名、仁義禮智皆性中一理之名」、卷一

〇一・185条(二五九二頁)「性只是一箇至善道理、萬善總名」。

(4) 天地間公共之理 卷十八・32条(三九九頁)に「問、觀物察已、還因見物反求諸已。此說亦是。程

子非之何也。曰、這理是天下公共之理、人人都一般、初無物我之分。不可道我是一般道理、人又是一般

道理。將來相比、如赤子入井、皆有怵惕。知得人有此心、便知自家亦有此心、更不消比並自知」、卷九

四・31条(二三七二頁)「問、太極動而生陽、靜而生陰、見得理先而氣後。曰、雖是如此、然亦不須如

此理會、二者有則皆有。問、未有一物之時如何。曰、是有天下公共之理、未有一物所具之理」。

(5) 天之所命く官便有職事 「命」を朝廷からの官職の任命、「性」を官職とする比喻は、さらに「心」

を「官人」とする喩えを伴って、卷四・92条(七七頁)に「又曰、天之所命、固是均一、到氣稟處便有

不齊。看其稟得來如何。稟得厚、道理也備。嘗謂命、譬如朝廷誥勅。心、譬如官人一般、差去做官。性、

譬如職事一般、郡守便有郡守職事、縣令便有縣令職事。職事只一般、天生人、教人許多道理、便是付人

許多職事。「別本云、道理只一般。」氣稟、譬如俸給。貴如官高者、賤如官卑者、富如俸厚者、貧如俸薄者、壽如三兩年一任又再任者、夭者如不得終任者。朝廷差人做官、便有許多物一齊趁「一作隨。」とあり、卷五・45条（八八頁）にも「或問心性之別。曰、這箇極難說、且是難爲譬喻。如伊川以水喻性、其說本好、却使曉不得者生病。心、大概似箇官人。天命、便是君之命。性、便如職事一般。此亦大概如此、要自理會得。如邵子云、性者、道之形體。蓋道只是合當如此、性則有一箇根苗、生出君臣之義、父子之仁。性雖虛、都是實理。心雖是一物、却虛、故能包含萬理。這箇要人自體察始得」とあり、朱熹常用のものである。

【一一七・30 校上】

朱子「天下のあらゆることはすべて取り組むべきことだ。とはいえ、やはり何に取り組むべきかということを決めつけてしまうことはできない。聖賢が人を教える際にも、どう取り組むかについて決めつけたことはない。日常生活のなかで、目の前にやって来たことに応じて、力を尽くして取り組めばよいのだ。今日ある事柄がやって来たかと思うと、明日また別の事柄がやって来るといふように、あらかじめ定めておくことなどできない。親に仕えようと決めたとしても、場面によっては年長者に仕えることにもなる。年長者に仕えようと決めたとしても、場面によっては君に仕えることにもなる。ただ日常において、やって来たことに応じて取り組めばよいのだ。」

天下萬事都是合做底。而今也不能殺定¹。合做甚底事。聖賢教人、也不會殺定教人如何做。只自家日間、看甚事來便做工夫。今日一樣事來、明日又一樣事來、預定不得。若指定是事親、而又有事長²。指定是事長、而又有事君³。只日間看有甚事來、便做工夫。

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一一七八頁)に収める。

(校2) 楠本本は「長」の後ろに「焉」が入る。

(校3) 楠本本は「君」の後ろに「焉」が入る。

(1) 殺定 一つに決めつけること。卷五五・25条(一三二二頁)「然聖人立法、亦自有低昂、不如此截然。謂如封五百里國、這一段四面大山如太行、却有六百里、不成是又挑出那百里外。加封四百里、這一段却有三百五十里、不成又去別處討一段子五十里來添。都不如此殺定」。

(26) 30条担当 原信太郎 アレシヤンドレ)

【一一七・31 (校1)】

朱子「道理というものは、金銀財宝を目の前にうず高く積んでおいて、人にそれぞれ分け与えていくようなものではなく、道筋を示して人に自分で探しに行かせるようなものだ。探し求めることができれば自分のものとなるが、見つけられなくともどうしようもない。自ら努力し、必死になって頑張っていくしかない

い。容易なことであるはずはない。」

這道理不是如堆金積寶在這裏、便把分付與人去、亦只是說一箇路頭、教人自去討。討得便是自底、討不得也無奈何、須是自著力、著些精彩〔一〕去做。容易不得。

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七九頁)に収める。

(1) 著些精彩 氣合いを入れる、必死になる、本気で打ち込む。卷一〇・21条(一六三頁)「看文字、須大段着精彩看。聳起精神、樹起筋骨、不要困、如有刀劍在後一般」、卷一二〇・34条(二八九一頁)「要他底、須著些精彩方得。然泛泛做又不得」。

【一一七・32〔校1〕】

朱子「たとえば十里先のことを、自分は五里まで行つて、人が十里先のことを話しているのを聞いてなるほどと思ひ、それ以上行かなくなつてしまふようなものだ。その人の話に偽りはないとしても、自分自身でそこまで行つて実際に見聞きしなければ、結局は信じることはできないのだ。」

譬如十里地頭〔校2〕、自家行到五里、見人說十里地頭事、便把爲是、更不進去。那人說固不我欺〔校3〕、然自

家不親到那裏、不見得真、終是信不過。

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七九頁)に収める。

(校2) 楠本本は「地頭」を「地」に作る。

(校3) 楠本本は「欺」の後ろに「不我誣」が入る。

【一一七・33(校1)】

朱子「七、八割方修養ができた段階になって、人にちよつと背中を押してもらうのは有益だ。十割の話は、十割全部理解できる。もし全く修養に努めていないとしたら、たとえ(一から十までの)十割の話聞いたとしても、どうにもならない。」

須是理會得七八分功夫(校2)了、被人決一決、便有益。説十分話、便領得。若不曾做工夫、雖説十分話、亦了不得(1)。

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七九頁)に収める。

(校2) 楠本本は「功夫」を欠く。

(1) 了不得　　どうにもならない、解決できない、理解できない。卷十三・91条(二三七頁)「須是信得及。這件物事好笑、不信、便了不得」。

【一一七・34 (校一)】

朱子「ひとかどの人物になりたいというのであれば、漫然と俗に流されてはいけない。人としての道を理解してこそ望みがあるというものだ。もし一生を何事もなく過ごすに越したことはないというのであれば、話にもならない。どのようにすれば凡俗を超えて聖人に到達できるのか、今日は俗人であっても明日には聖賢となるには、どのようにすればよいのかを考えなければいけない。すぱっと抜きん出る、「先生はここですくつと姿勢を正し、力を込めて言われた。」そうしてこそ進歩できるのだ。もし分かってもよし、分からなくてもよしというのであれば、無駄に一生を過ごすことになる。」

若道^(校2) 生做^(校1) 一世^(校1) 人、不可汎汎隨流^(校3)、須^(校4) 當了得人道、便有可望。若道不如且過了一生、更不在說^(校5)。須思量到如何便超凡而達聖^(校3)、今日爲鄉人、明日爲聖賢、如何會到此。便一聳拔。「聳身著力言^(校6)。」如此、方有長進。若理會得也好^(校7)、理會不得也好、便悠悠^(校4)了。

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(二五七九頁)に収める。

(校2) 楠本本は「若道」を欠く。

(校3) 楠本本は「隨流」の後ろに「地」が入る。

(校4) 楠本本は「須」を「便」に作る。

(校5) 楠本本は「便有可望。若道不如且過了一生、更不在説」を欠く。

(校6) 楠本本は「聳身著力言」の小字注を欠く。

(校7) 楠本本は「理會得也好」を欠く。

(1) 生做一世人 その時代のひとかどの人物になる、その時代を担う人になる。卷一〇八・32条(二六八四頁)「天生一世人才、自足一世之用」。

(2) 不在説 言うまでもない、話すまでもない。「不在」は「不必」「無須」の意。卷三四・221条(九〇六頁)「聖人固不在説、但顔子得聖人説一句、直是傾腸倒肚便都了、更無許多廉纖纏擾、絲來線去」。

(3) 超凡而達聖 卷八・38条(二三五頁)「爲學、須思所以超凡入聖。如何昨日爲鄉人、今日便爲聖人。須是竦拔、方始有進」。

(4) 悠悠 のんびり、だらだら。朱熹はしばしば門人たちの怠慢を「悠悠」という表現で戒めている。

卷一一三・33条(二七五〇頁)「悠悠於學者最有病」、卷三四・143条(八八九頁)「爲學要剛毅果決、悠悠不濟事」、卷一一六・33条(二七九八頁)「若如此悠悠、恐虛過歲月」。

朱子「書物を読むには、一つのものに取り組んできちんと理解してから次にゆく。読書だけでなく、たとえば物事に出会ったときにも、その事についてどうすればよいのかをよく考えて、妥当に対処できたら、その次の事に取り組むのだ。書物はただうわべを読むだけではいけないし、物事もまたうわべだけで取り組んではいけない。天下に読まなくてよい本などないし、やらなくてよい事もない。もしある一冊の本を読まなければ、自分の中でその一冊分の道理を欠くことになる。ある一つの事を行わなければ、自分の中でその事の道理を欠くことになる。大きいものでは天地陰陽、細かくいえば昆虫草木に至るまで、すべて取り組んで理解すべきなのだ。一つの物事を理解しなければ、自分の中でその一つの物事の道理を欠くことになるのだ。」

讀書理會一件了(校二)、又一件。不止是讀書、如遇一件事、且就這事上思量合當如何做、處得來當、方理會別一件。書不可只就皮膚上看、事亦不可只就皮膚上理會。天下無書不是合讀底、無事不是合做底(一)。若一箇書不讀、這裏便缺此一書之理。一件事不做、這裏便缺此一事之理。大而天地陰陽、細而昆蟲草木、皆當理會。一物不理會、這裏便缺此一物之理。

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(一五七九頁)に収める。

(校2) 楠本本は「了」の字を欠く。

(1) 天下無書不是合讀底、無事不是合做底、 卷二二〇・34条(二八九一頁)「學固不在乎讀書、然不

讀書、則義理無由明。要之、無事不要理會、無書不要讀。若不讀這件書、便闕了這一件道理、不理會這一事、便闕這一事道理」。

【一一七・36 (校し)】

朱子「天下に説明できない道理などない。『論語』の「人のために謀りて忠、朋友と交わりて信、伝えられて習う」などもすべて目の前のことであつて、すべて説明することができる。ただ、「熟」ということだけは言葉では説明できない。「熟」以外のことは、説明できないことはない。まだ「熟」さない時には、こちらに置いてみても落ち着かず、あちらに置き直してみてもうまくない。そうして結局どこにも落ち着かないのだが、それでもそこから努力していくしかない。「熟」の境地に至れば、こちらに置いてみてもよいし、あちらに置いてみてもよい。どちらに転んだとしてもすべてうまくいく。(孟子の)所謂「居ること安ければ、則ち資ること深く、資ること深ければ、則ち左右其の原に逢う(そこに安定できれば、しっかりとそれに基づくことができ、しっかりと基づくことができれば、日常のすべての事柄がその根源に一致する)」というやつだ。たとえば梨や柿は熟していないときは酸っぱくて食べられないが、熟すれば一様に美味しい。大きな違いは、ただ熟しているか否かに他ならない。「徐高の記録も同じ。」

天下無不可說底道理。如爲人謀而忠、朋友交而信、傳而習⁽¹⁾、亦都是眼前底⁽²⁾事、皆可說⁽³⁾。只有一箇熟處說不得。除了熟之外、無不可說者。⁽⁴⁾未熟時、頓放這裏又不穩帖、拈放那邊又不是。然終不成住了、也須從這裏更著力始得。到那熟處、頓放這邊也是、頓放那邊也是、七顛八倒無不是、所謂居之安、則資之深、資之深、則左右逢其原⁽⁵⁾。譬如梨柿、生時酸澀喫不得、到熟後、自是一般甘美。相去大遠、只在熟與不熟之間⁽⁶⁾。「萬錄同。」

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(二五八〇頁)に収める

(校2) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「底」の字を欠く。

(校3) 楠本本は「皆可說」を欠く。

(校4) 楠本本は「未熟」の前に「且」が入る。

(1) 爲人謀而忠、朋友交而信、傳而習 『論語』学而「曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、与朋友交而不信乎、傳不習乎」。

(2) 居之安、則資之深、資之深、則左右逢其原 『孟子』離婁下「孟子曰、君子深造之以道、欲其自得之也。自得之則居之安、居之安則資之深、資之深則取之左右逢其原」。

(3) 只在熟與不熟之間 卷十八・89条(四一三頁)「聖人與庸凡之分、只是箇熟與不熟」、同・122条(四二二頁)「某常說道、天下事無他、只是箇熟與不熟」、卷二二・9条(二九二〇頁)「這箇道理、古時

聖賢也如此說、今人也如此說、說得大概一般。然今人說終是不似、所爭者只是熟與不熟耳」。

【一一七・37（校上）】

私（陳淳）に仰った。

朱子「『大学』はもう読み終えたのならば、朝夕いつも繰り返して声に出して読み、忘れないようにしなさい。」

謂淳曰、大學已是讀過書、宜朝夕常常溫誦勿忘。

（校上）楠本本は本条を卷一一五（一五八〇頁）に収める。

【一一七・38（校上）】

朱子「正しい道理を探究するには、実際に努力しなければ何にも得られない。科擧の受験勉強とても、努力せねば精密なものにはならない。老蘇（蘇洵）は壮年になってはじめて文章を学び始めたので、必死に努力をして、「人の言葉というものは、こうあらねばならないのだ」という理解に達した。これこそ彼の悟つ

た境地なのだ。文章を作るときにはこうでなければならぬが、やはり熟したからこそ、そうできるのだ。ちようど我々が正しい道理を探索して、熟するに至ってはじめて、人の父としては絶対に「慈に止まる」、人の子としては絶対に「孝に止まる」ということを悟るようなものだ。老蘇の文章が卓抜しているのは、熟しているということに他ならない。(息子の)子由(蘇轍)は、彼にはだれも及ばない。」

講究義理、不下得工夫也不得。如舉業、不下得功夫也不解精。老蘇年已壯方學文、煞用力、到所謂若人之言固當然者⁽¹⁾、這處便是悟。做文章合當如此、亦只是熟、便如此。恰如自家們⁽²⁾講究義理到熟處、悟得爲人父確然是止於慈、爲人子確然是止於孝⁽³⁾。老蘇文豪傑、只是熟。子由取他便遠⁽³⁾。

(校1) 本条は、楠本本の「訓門人」には収められていない。

(校2) 正中書局本は「們」を「門」に作る。

(1) 若人之言固當然者 蘇洵『嘉祐集』卷一二に「讀之益精、而其胸中豁然、以明若人之言固當然者。然猶未敢自出其言也。時既久、胸中之言日益多、不能自制、試出而書之」とある。

(2) 爲人父確然是止於慈、爲人子確然是止於孝 『大学』(章句伝三章)「爲人子止於孝、爲人父止於慈」。

(3) 子由取他便遠 朱子の三蘇評については、以下を参照。卷一三九・39条(三三〇六頁)「東坡文字明快。老蘇文雄渾、儘有好處」、同67条(三三二二頁)「或問、蘇子由之文、比東坡稍近理否。曰、亦

有甚道理。但其說利害處、東坡文字較明白、子由文字不甚分曉。要之、學術只一般、同61条（三三一頁）「老蘇文字初亦喜看、後覺得自家意思都不正當。以此知人不可看此等文字、固宜以歐曾文字爲正。東坡子由晚年文字不然、然又皆議論衰了。東坡初進策時、只是老蘇議論」。

【一一七・39（校）】

質問 「文章を読む際ひたすら本文に即すのは、もちろん古人の真意を理解するためです。しかしながら、それを敷衍して考えていかねば、実際の場面ではうまく合致しなくなりやすいかと存じますが、如何でしょうか。」

朱子 「本文がすっかり自分のものになってこそ、敷衍することもできるので。本文がすっかり自分のものになっていなければ、敷衍して間違っただけでなく、その前からもう間違っってしまったている。」

問 「看文字只就本句、固是見得古人本意。然不推廣之、則用處又易得不相浹、如何。」曰 「須是本句透熟、方可推。若本句不透熟、不惟推便錯、於未推時已錯了。」

（校1）楠本本は本条を卷一一五（二五八〇頁）に収める。

朱子「学べば、物事に対処するにもすべて理にかなう。学ばなければ、理の見方はそういうふうに行き届かず、そういうふうには広大ではなく、細密ではない。とはいえ、理というのも外側から無理矢理持ってきたものではなく、自分自身が（孟子の言葉を借りれば）「固有」する道理なのだ。（孟子のいう）「堯舜は之性にす」とは、この理が当初より失われていないということ、「湯武は之に反る」とは、いくらか見失ってしまったが、もとの状態に復帰したということだ。学問とは、当初のものに復帰することに他ならない。つまり、以前に天から分け与えられたものを今なくしてしまったのだから、どうして汲々と身を修めて取り戻さないでおられようか、ということ、だからこそ、学問は切迫したものなのだ。学ばなければ、無理矢理身を引き締めるばかりで、物事に対処しても理が明らかにならず、ひたすら私意に任せるばかり、平生においては無理が利いても、一旦緩急あれば瞬く間に乱れてしまうのだ。」

學、則處事都是理。不學、則看理便不恁地周匝、不恁地廣大、不恁地細密。然理亦不是外面硬生校2道理、只是自家固有1之理。堯舜性之2、校3此理元無失校4。湯武反之3、已有些子失、但復其舊底。學只是復其舊底而已。蓋向也交割得來、今却失了、可校5不汲汲自修校6而反之乎。此其所以爲急。不學、則只是硬隄防、處事不見理、一向校7任私意。平時却也勉強校8去得、到臨事變、便亂了。

（校1）楠本本は本条を卷一一五（二五八〇頁）に収める。

- (校2) 楠本本は「硬生」の後に「底」が入る。
- (校3) 楠本本は「此理」の前に「即」が入る。
- (校4) 楠本本は「失」を「缺失」に作る。
- (校5) 楠本本は「可」を「何」に作る。
- (校6) 正中書局本・和刻本は「脩」を「脩」に作る。
- (校7) 楠本本は「一向」を「只是」に作る。
- (校8) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「勉強」を「強勉」に作る。
- (1) 固有 『孟子』告子上「仁義禮智非由外鑠我也。我固有之也」。
- (2) 堯舜性之 『孟子』尽心上「堯舜性之也、湯武身之也、五霸假之也」。
- (3) 湯武反之 『孟子』尽心下「堯舜性者也、湯武反之也」。

【一七・41 (校)】

質問 「持敬」と「致知」とは、相互に發揮させ合っていくのでしょうか。」

朱子「昔の人がそう言っているのだから、間違い無くそうなのだ。この上、それが發揮させるか否かを訊ねてどうしようというのだ。昔の人の言葉は書物の中に書かれているのであって、間違いであるはずはない。ただその通りに努力していけば、味わいというものが分かるだろう。「持敬」を實踐せず、ただ口先で「持

敬」を言うばかりで何になるう。「致知」を實踐せず、ただ口先で「致知」を言うばかりで何になるうか。譬えるならば、他人がご飯を炊いて、お椀に盛っていれば、もちろんうまいだろうし、人に害を与えるものでないことは確かだ。しかし、自分が實際に口にしてこそうまさがるのであつて、うまいかどうか人に訊ねてどうするのだ。まさか、こちらでちよつと「持敬」の修養をしては、あちらで「致知」が促されたかどうかを確認し、あちらでちよつと「致知」の修養をしては、こちらで「持敬」が促されたかどうかを確認するといふわけにはいくまい。そんなことをしては、きりが無い。」

季文（劉黻）「持敬」と「致知」は、並行しても互いに妨げとはならないのではないのでしょうか。」

朱子「そういう問いも無用のこと、どちらも実践していかなければならないということだ。」

問「持敬致知、互相發明否。」曰「古人如此説〔一〕、必須是如此。更問他發明與不發明要如何。古人言語寫在冊子上、不解錯了。只如此做工夫、便見得滋味。不做持敬、只說持敬作甚。不做致知、只說致知作甚。譬如他人做得飯熟、盛在椀裏、自是好喫、不解毒人、是定。自家但喫將去、便知滋味、何用問人。不成自家這一邊做得些小持敬工夫、計會那一邊致知發明與未發明、那一邊做得些小致知工夫、又來計會這一邊持敬發明與未發明。如此、有甚了期。」季文問「持敬致知、莫是並行而不相礙否。」曰「也不須如此、都要做將去。」

（校一）楠本本は本条を卷一一五（一五八〇頁）に収める。

(校2) 楠本本は「腕」を「挽」に作る。

(1) 古人如此説 『遺書』卷十八・28条(一八八頁)「涵養須用敬。進學則在致知」を指すか。

【一一七・42 (校↓)】

朱子「道理を考えるには大きなところから取り組んでこそ、目の前が開けていく。壁の隅をつつくようなことをしてはいけない。そんなことをすれば、狭苦しく、ちよつと動けばすぐにぶつかり、行き場がなくなってしまう。いま、まずは天理と人欲、義と利、公と私を明瞭に区別しなければならぬ。自分自身の普段の行ないとそれとを付き合わせて点検するのだ。だんだん理解が進めば、目の前が次第に開けていくはずだ。真ん中の大きな所に関心に向けて実践に取り組もうとせず、ひたすら壁の隅をつついているようでは、たとえ一つの文章が理解できたとしても、その一節が明らかになるだけのこと、そこから得られる道理は小さい。『詩経』の破斧の詩なども、あの「周公東征し、四国を是れ皇す^た」を見て、周公が心を用いたことを理解してこそ良いのだ。」

看道理須要就那大處看、便前面開闊。不要就壁角裏。地步窄、一步便觸、無去處^{校2}了。而今且要看天理人欲、義利公私、分別得明。將自家日用底與他勘驗。須漸漸有見處、前頭漸漸開闊。那箇大壇場¹、不去上面做、不去上面行、只管在壁角裏、縱理會得一句、只是一句透、道理小了。如破斧詩²、須看那周公東

征、四國是皇、見得周公用心始得。

(校1) 楠本本は本条を卷一一五(二五八〇頁)に収める。また、冒頭から「道理小了」までの内容は黄義剛の記録とする卷十三・35条(二二七頁)に見え、「看道理須要就那箇大處看。須要前面開闊、不要就那壁角裏去。而今須要天理人欲、義利公私、分別得明白。將自家日用底與他勘驗、須漸漸有見處。若不去那大壇場上行、理會得一句透、只是一句、道理小了」と表現の相違も認められる。それ以降は、同じく黄義剛録の卷八一・82条(二二一四頁)にほぼ重複する。

(校2) 底本は「去處」を「處去」に作るが、楠本本・朝鮮整版・正中書局本に従って改めた。

(1) 大壇場 真ん中の大きな所、一番要となる大きな所、の意味か。『語類』には他に用例は見えないが、門弟の陳淳の「答趙司直季仁」一(『北溪大全集』卷二四)に「大抵今世士習顛迷於舉業一段骨董。殊不知、聖門有大壇場大境界、而此間尤陋無一人置得」とある。

(2) 破斧詩 『詩経』邶風・破斧「既破我斧、又缺我斨。周公東征、四國是皇。哀我人斯、亦孔之將」。『詩集伝』に「今觀此詩、固足以見周公之心、大公至正、天下信其無有一毫自愛之私。抑又以見當是之時、雖被堅執銳之人、亦皆能以周公之心爲心、而不自爲一身一家之計。蓋亦莫非聖人之徒也」と注す。この「被堅執銳之人」を「聖人之徒」と評する解釈に門弟の李唐咨が疑義を呈したことに對して、朱子は「不是聖人之徒時、便是賊徒。公多年不相見、意此來必有大題目可商量、今却恁地。如何做得工夫。恁地細碎」と応じている(卷八一・84条)。同じ問題をめぐって、陳淳にも「只泥一句、便是未見得他意

味」と告げており（巻八一・86条）、いずれも些細な問題ばかりを注視する姿勢に対する教導である。なお、次の本巻43条（李唐咨と陳淳の二人に対する訓戒）にも「如昨日説破斧詩、恐平日恁地枉用心處多」との言が見え、時期を同じくする一連の遣り取りと察せられる。

（37）42条担当 阿部 光麿

【一一七・43 （校）】

諸友が先生の病をお見舞いして、退出しようとした時、

朱子「堯卿（李唐咨）と安卿（陳淳）はもう少しここにいなさい。十年ぶりだが、いっしよに議論できるような何か大きな問題とか、大きな疑問点はあつたかね。」

陳淳「ここ数年、日常における大事も小事も、ひとつひとつがすべて天理の働きであり、一事として取り組まなくてもよいことはなく、また後回しにしたり避けたりすることもできないということが分かりました。ある事に直面したら、理によつて判断し、細心に力を尽して最後までやり遂げる。何度かそのようにしていれば、自分の心は磨かれてゆき、だんだん堅固に定まってゆきます。そうなれば、大きな事態に遭つても大きいとは感じず、難しい事でも難しいとは感じず、ひどい荒れ地のような苦難の極みであっても、荒れ地とも苦難とも感じずに、逆境に陥つても恨む気持ちもなく、愛し羨むべき捨て難いものに対しても、何の未練やこだわりの気持ちもなくなります。目の前に見えるのはただ理だけであつて、水を得て船が浮ぶように、

何らぐずぐずためらうことはありません。孔夫子が「曾点に与くみした」意味、顔子の「樂しみ」の意味、漆雕開の「信」の意味、『中庸』の「鳶飛び魚躍る」の意味、周子の「洒落」、程子の「活潑潑」の意味、こゝうといったものがすべて目の前に見るかのように、本当にその通りなのだということが分かります。さらに「礼儀三百、威儀三千」、そのすべてが一つとして天理の働きのないものはなく、易の三百八十四爻のそれぞれは、まさしく日常の世界から天理の働きの析出した条目だと悟りました。古の聖人も後世の哲人も軌を一にしています。とはいえ、その理の大なる所は人倫にこそ在り、一身の修養の要は「敬」にこそ在りま
す。「敬」であれば心は常にはつきりと目覚め、大綱が卓然と明らかになり、天理はどんな時にもあまねく行き渡るのです。そして「主敬」の修養は、ほんの一時も気を緩めないこと、これに尽きます。心が常に「敬」であれば、常に「仁」が実現しているのです。」

朱子「そうやって並べ立てるだけなら容易いことだ。」
しばらくして、

朱子「心を勞して、果てしもない所に落ちこんでしまわなかが心配だ。」

諸友問疾、請退。先生曰「堯卿安卿^①且坐。相別十年、有甚大頭項^②工夫、大頭項疑難、可商量處。」

淳曰「數年來見得日用間大事小事分明、件件都是天理流行、無一事不是合做底、更不容挨拶^③閃避。撞著

^④這事、以理斷定、便小心盡力做到尾去。兩三番後、此心磨刮出來、便漸漸堅定。雖有大底、不見其爲大、
難底、不見其爲難、至磽确至勞苦處、不見其爲磽确勞苦^⑤、橫逆境界、不見其有憾恨底意、可愛羨難割捨

底、不見其有粘滯底意。見面前只是理、覺如水到船浮、不至有甚慳澁。而夫子與點之意⁽⁴⁾、顏子樂底意⁽⁵⁾、漆雕開信底意⁽⁶⁾、中庸鳶飛魚躍底意⁽⁷⁾、周子洒落⁽⁸⁾及程子活潑潑底意⁽⁹⁾、覺見都在面前、真箇是如此。而禮儀三百、威儀三千⁽¹⁰⁾、亦無一節文非天理流行。易三百八十四爻時義、便正是就日用上剖析箇天理流行底條目。前聖後哲、都是一揆。而其所以爲此理之大處、却只在人倫、而身上工夫切要處、却只在主敬。敬則此心常惺惺、大綱卓然不昧、天理無時而不流行。而所以爲主敬工夫、直是⁽¹¹⁾不可少時放斷。心常敬、則常仁。」先生曰「恁地汎說也容易。」久之、曰「只恐勞心落在無涯可測之處。」

(校1) 楠本本は、本条を卷一一五(一五八一頁)に収め、全体を七条に分けている。

(校2) 楠本本は「撞著」を「吾身撞着」に作る。

(校3) 楠本本は「不見其爲礪確勞苦」を「不見其爲礪確不見其爲勞苦」に作る。

(校4) 朝鮮整版は「洒」を「灑」に作る。

(校5) 底本は、「是」を「時」に作る。楠本本・正中書局本・朝鮮整版に従い改める。

(1) 堯卿安卿 李唐咨と陳淳。李唐咨は陳淳の岳父。陳淳は紹熙二年(一一九一年)に朱子と別れてのち、八年後の慶元五年(一一九九年)に、李唐咨とともに朱子と再会している。

(2) 大頭項 大きな項目、要となる端緒。卷八・20条(一一三一頁)「學者貪高慕遠、不肯從近處做去、如何理會得大頭項底」、卷五八・2条(一三五八頁)「如世上固是無限事、然大要也只是幾項大頭項」。

(3) 挨推 おしやって後回しにする。卷二一・90条(五〇〇頁)「凡事當盡力爲之、不可挨推只做七八

分、留兩三分」。

(4) 夫子與點之意 『論語』先進「……點爾何如。鼓瑟希、鏗爾、舍瑟而作。對曰、異乎三子者之撰。

子曰、何傷乎。亦各言其志也。曰、莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。夫子喟然歎曰、吾與點也」。

(5) 顏子樂底意 『論語』雍也「子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回也不改其樂。賢哉回也」。『遺書』卷二上・23條(一六頁)「昔受學於周茂叔、每令尋顏子仲尼樂處、所樂何事」。

(6) 漆雕開信底意 『論語』公冶長「子使漆雕開仕。對曰、吾斯之未能信。子說」。

(7) 中庸鳶飛魚躍底意 『中庸』(章句十二章)「詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵。言其上下察也。君子之道、造端乎夫婦。及其至也、察乎天地」。(9) 参照。

(8) 周子洒落 黃庭堅「濂溪詩」序(『山谷集』卷一)「春陵周茂叔、人品甚高、胸中灑落、如光風霽月」。『近思錄』卷十四に引く。

(9) 程子活潑潑底意 『遺書』卷三・1條(五九頁)「鳶飛戾天、魚躍于淵。言其上下察也。此一段子思喫緊爲人處、與必有事焉而勿正心之意同、活潑潑地。會得時活潑潑地、不會得時只是弄精神」。

(10) 禮儀三百、威儀三千 『中庸』(章句二七章)「優優大哉、禮儀三百、威儀三千、待其人然後行」。

そこでお尋ねした。

陳淳「以前お見せした「点に与せん」に関する拙論はいかがでしたでしょうか。」

朱子「私は平生より、人がこの話をするのを好ましく思っていない。『論語』の一書は、「学而」から「堯曰」に至るまで、すべて修養の実践についてのことだ。まさか「点に与せん」だけを論じていれば、その他はすべてどうでもよいというわけにはいくまい。聖賢は、親に仕えるにはこのように、君に仕えるにはこのように、年長者に仕えるにはこのようにしなければならぬ、言葉はこう、行ないはこうでなければならぬ、というように、すべて実践しやすいうように言ってくれている。聖賢の言葉を全体を通してじっくり味わうように読めば、おのずとそういったことが目の前に見るかのように明白になるはずだ。それをすべて投げ捨てて、ただただ「点に与せん」についてばかり論じているのは、あたかも饅頭の先端だけをつまんで食べ、中の餡を食べず、美味しさの多くを味わわないようなものだ。昔はこの「点に与せん」などのことを理解する人がいなかったから、議論するのも悪くはなかった。今やこの議論がさかんに行なわれるようになったが、どれもみな滑稽なもので、まったく様になっていない。近頃のこういった話はすべて無駄なおしやべりに過ぎず、本当に身に切実な考えを積み重ねたものではない。先日、廖子晦（徳明）も「点に与せん」と鬼神とを論じ、しつこく質問してきたが、言えば言うほど支離滅裂になり、結局收拾がつかなくなってしまう。聖賢の教は、「下学（具体的に下から積み上げていく学問）」の実践でないものはない。「一貫」の旨を、どうして最初からすぐに曾子に言わず、曾子が一つ一つの物事をすべて理解するのを待ってはじめて示したのか。子貢は非常に聡明であったのに、後々になってはじめて「女子を以て多く学んで之を識る者と為すか」「然り、非ならんか」「非なり、予一以て之を貫く」という問答があった、これはいったいどういうことか。

万理はつきつめれば一理とはいえ、学ぶ者はまずは万理の中の無数の端緒に取り組まなければならないのであつて、それらをあらゆる方面から総合してこそ、おのずと一理であることが分かるのだ。万理に取り組みもせず、ひたすら一理を求めればかりで、「点に与せん」だとか、顔子の「楽しみ」はどうだとかの議論ばかりをしたがるが、程先生の語録にはあらゆる事が論じられているのに、この議論は数箇所しか見えない。（程子は）なぜこんなに少ししか話題にしていないのか、それなのに今の学ぶ者たちなぜあんなに多く話題にするのか。空虚な議論に過ぎないのだ。」

因問「向來所呈與點說一段〔1〕如何。」曰「某平生便是不愛人說此話。論語一部自學而時習之至堯曰、都是做工夫處。不成只說了與點、便將許多都掉了。聖賢說事親便要如此、事君便要如此、事長便要如此、言便要如此、行便要如此、都是好用工夫處。通貫浹洽、自然見得在面前。若都掉了、只管說與點、正如喫饅頭、只撮箇尖處、不喫下面餡子、許多滋味都不見。向來〔2〕此等無人曉得、說出來也好。今說得多了、都〔3〕是好笑、不成模樣。近來覺見說這樣話、都是閑說、不是真積實見。昨廖子晦亦說與點及〔4〕鬼神、反覆問難、轉見支離沒合殺〔5〕了。聖賢教人、無非下學〔6〕工夫。一貫之旨〔7〕、如何不便說與曾子、直待他事事都曉得、方說與他。子貢是多少聰明、到後來方與說、女〔8〕以予爲多學而識之者與〔9〕。曰、然、非與〔10〕。曰、非也、予一以貫之。此意是如何。萬理雖只是一理、學者且要去萬理中千頭百緒都理會、四面湊合來、自見得是一理。不去理會那萬理、只管去理會那一理、說與點、顔子之樂如何。程先生語錄事事都說、只有一兩處說此、何故說得恁地少。而今學者何故說得恁地多。只是空想象。」

- (校1) 楠本本は「來」を欠く。
- (校2) 正中書局本・朝鮮整版は「都」を「却」に作る。
- (校3) 楠本本は「及」を欠く。
- (校4) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「女」を「汝」に作る。
- (校5) 楠本本は「與」を「歟」に作る。
- (校6) 楠本本は「與」を「歟」に作る。
- (1) 向來所呈與點說一段 『北溪大全集』卷八「詳集注与点說」。前節注(4)参照。
- (2) 沒合殺 收拾がつかない、(話などに)まとまりがつかない。卷五五・61条(一三二〇頁)「墨氏兼愛、又弄得沒合殺」、卷四〇・34条(一〇三二頁)「曾皙不曾見他工夫、只是天資高後自說著。如夫子說、吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之、這便是狂簡。如莊列之徒、皆是他自說得恁地好、所以夫子要歸裁正之。若是不裁、只管聽他恁地、今日也浴沂詠歸、明日也浴沂詠歸、却做箇甚麼合殺」。
- (3) 下學 『論語』憲問「子曰、莫我也夫。子貢曰、何爲其莫知子也。子曰、不怨天、不尤人、下學而上達。知我者其天乎」。
- (4) 一貫之旨 『論語』里仁「子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」。『集注』に「曾子於其用處、蓋已隨事精察而力行之、但未知其體之一爾。夫子知其眞積力久、將有所得、是以呼而告之。曾子果能默契其指、即應之速而無疑也」とある。
- (5) 女以予爲多學而識之者與 『論語』衛靈公「子曰、賜也、女以予爲多學而識之者與。對曰、然。非

與。曰、非也。予一以貫之。

(43条前半担当 小池直)

程先生は「学ぶ者は仁の本体を認識し、それを本当に自分のものにして、ひたすら義理でもって養い育ていかなければならない」と言ったが、人が「養い育てる」の意味を理解しないのではないかと恐れて、その後「経書の正しい意味を求めることなどが、すべて養い育てるということだ」と付け加えた。呂晋伯(大忠)が伊川(程頤)に『論語』『孟子』は、まずは緊要のところに取り組んでいくのはいかがでしょうかと質問すると、伊川は「それはそれでよいが、もしその箇所が理解できても、けっきょく隅々にまで行きとどくことはできない」とおっしゃった。のちに晋伯は一生涯この欠点から抜け出せず、視野の狭い議論をするばかりで、禅学に陥ってしまった。聖賢の教訓に、身近で实际的でないものはない。たとえば『論語』の「我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす」や『中庸』の「徳性を尊び問学に道り、広大を致して精微を尽くし、高明を極めて中庸に道り、故きを温ねて新しきを知り、厚きを敦くして礼を崇ぶ」、「『中庸』の」「博く之を学び、審らかに之を問ひ、慎みて之を思ひ、明らかに之を弁じ、篤く之を行ふ」や『論語』の「君子は食飽くを求むる無く、居安きを求むる無く、事に敏にして言を慎み、有道に就きて焉を正す」などは、すべて同じ主旨なのだ。一般に道理を考えるには、ゆったりと心を広げて、虚心になつて取り組まなければいけない。もしも本当に理解できたならば、ほんの一、二節を論じるだけで、そこに

多くの道理を読み取ることができらる。何か大きな言葉でもつて一氣にすべてを包み込もうとしてはならない。その中には自ずと軽重があるはずで、それに留意しなければ、大きく言えば大きすぎ、細かに言えば訳が分からなくなってしまう。昨日の「破斧」の詩についての解釈も、おそらく常日頃そういふうに間違つたところに心を砕いて労力を費やしていることが多いということなのだろう。」

程先生曰、學者識得仁體、實有諸己、只要義理栽培⁽¹⁾。恐人不曉栽培、更說、如求經義、皆栽培之意。

呂晉伯問伊川⁽²⁾、語孟且將緊要處理會如何。伊川曰、固是好。若有所得、終不淡洽。後來晉伯終身坐此病、說得孤單⁽³⁾、入禪學去。聖賢立言垂教、無非著實。如博我以文、約我以禮⁽⁴⁾。如尊德性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸、溫故而知新、敦厚以崇禮⁽⁵⁾。如博學之、審問之、慎⁽⁶⁾思之、明辨之、篤行之⁽⁶⁾。如君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉⁽⁷⁾等類⁽⁶⁾、皆一意也。大抵⁽⁶⁾看道理、要得寬平廣博、平心去理會。若實見得、只說一兩段、亦見得許多道理。不⁽⁶⁾要將一箇大底言語⁽⁶⁾都來罩了。其間自有輕重、不去照管、說大底說得太大、說小底又說得都無⁽⁶⁾巴鼻⁽⁸⁾。如昨日說破斧詩⁽⁹⁾、恐平日恁地枉用心處多。」

(校1) 楠本本・正中書局本・和刻本は「慎」を「謹」に作る。

(校2) 楠本本は「類」を「其類」に作る。

(校3) 楠本本は「大抵」の二字を欠く。

(校4) 楠本本は「不」の字を欠く。

(校5) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「言語」を「語言」に作る。

(校6) 楠本本は「無」を「没」に作る。

(1) 程先生曰、學者識得仁體、實有諸己、只要義理栽培 『遺書』卷二上・21条(一五頁)「學者識得仁體、實有諸己、只要義理栽培、如求經義、皆栽培之意」、『近思錄』卷二・20条に採録する。『遺書』や『近思錄』を見る限り、二程いずれの語であるかは未詳だが、『語類』卷九五・126条(二四四七頁)では程顥の語として引かれている。

(2) 呂晉伯問伊川、呂大忠、晋伯は字。『資料索引』一一八八頁、『学案』卷三一。『外書』卷十二・130条(四四一頁)「問、將孔孟之言切要處思索如何。曰、須是熟看語孟、玩味咀嚼。伊川云、若熟看語錄、亦自得者此也。當時門人、有問且將語孟緊要處看如何。伊川曰、固是好。若有得、終不浹洽。蓋吾道非如釋氏一見了便從空寂去。』『近思錄』卷三・42条に採録。

(3) 孤單 視野が狭く、広がりのないこと。卷十四・91条(二六六頁)「傳敬子説、明明德。曰、大綱也是如此。只是説得恁地孤單、也不得。且去子細看」、卷一〇五・29条(二六二九頁)「近思錄首卷難看。某所以與伯恭商量、教他做數語以載於後、正謂此也。若只讀此、則道理孤單、如頓兵堅城之下、却不如語孟只是平鋪説去、可以游心」。次の44条にも見える。

(4) 博我以文、約我以禮 『論語』子罕。

(5) 尊徳性而道問學、敦厚以崇禮 『中庸』(章句二七章)。

(6) 博學之、篤行之 『中庸』(章句二〇章)。

(7) 君子食無求飽、就有道而正焉 『論語』学而。

(8) 無巴鼻 とりとめがない、わけがわからない、根拠がない。「没巴鼻」も同じ。卷一一六・15条(二七九一頁)「如此講書、如此聽人說話、全不是自做工夫、全無巴鼻」、卷十三・16条(二二四頁)「人生都是天理、人欲却是後來没巴鼻生底」。

(9) 昨日説破斧詩 前条(42条)を指す。「破斧詩」については、前条注(2)を参照。

陳淳「昨日、先生にご教誨たまわり、その他の同様のことにしても、疑問がなくなりました。」

朱子「學問というのは、文章を作るように、よくなければすぐに改めればよいというものではない。學問においては、善悪や邪正の区別をするにも、十分に妥当であるところを求めて、ようやく聖賢と一致するのだ。「破斧」の詩については、あのように論じるのも間違ではないが、好ましくないということだ。一側面を説くのみで、要点を失っては、ゆがんで誤ってしまう。そんなふうでは、道理の見方が浅くなってしまい、何も成し得ない。ちようど船を浅瀬に浮かべて、深みに向かって漕ぎ出そうとせず、身動きが取れなくなっているようなもの、必ず流れの中にゆつたりと漕ぎ出さなければならぬのだ。」

淳曰「昨聞先生教誨、其他似此様處、無所疑矣。」曰（後）「學問不比做文字、不好便改了。此却是分別善

惡邪正、須要十分是當、方與聖賢契合。如破斧詩、恁地說也不錯、只是不好。說得一角、不落正腔窠⁽¹⁾、
啗斜⁽²⁾了。若恁地看道理淺了、不濟事。恰似撐船放淺處、不向深流、運動不得、須是運動游泳於其中⁽³⁾。」

(校1) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(1) 落正腔窠 要点・要領を得ること。ぴたりと規範に当てはまること。「入腔窠」も同じ。卷四一・
20条(一〇四六頁)「克己是大做工夫、復禮是事事皆落腔窠」、卷一〇四・32条(二六一八頁)「舊來失
了此物多時、今収來尚未便入腔窠、但當盡此生之力而後已」。

(2) 啗斜 ゆがんで正しくないこと。卷十一・25条(一七九頁)「聖賢言語、當虚心看、不可先自立說
去撐拄、便啗斜了」。

(3) 撐船放淺處 須是運動游泳於其中 卷一一四・34条(二七六三頁)「如今學者考理、一如在淺水上
撐舡相似、但覺辛苦不能嚮前。須是從上面放得些水來添、便自然撐得動、不用費力、滔滔然去矣」。

陳淳「聖人の千言万語は、すべて日常の中で各々が本分として努力すべき修養です。ただ、議論を立て
るに際しては、それらを総合した要点を見出さなければならぬと思うのですが、それを一言で言い当てる
のは容易ではありません。」

朱子「要点などということを言うものではない。『論語』に「我を博むるに文を以てし、我を約するに

礼を以てす」とあるが、「博文」とは一つ一つ実践していかなければならないのであって、どうして要点などを言ったであろうか。またたとえば『孟子』に「深く之に造るに道を以てするは、其の之を自得するを欲すればなり」とあるが、「深く造るに道を以てす」というのも、一つ一つ実践していかなければならないのであって、「自得」に至ってはじめてすべてが集約する要点となるのだ。顔子の「己に克ちて礼に復す」なども、「礼に非ざれば視る勿かれ、礼に非ざれば聴く勿かれ、礼に非ざれば言ふ勿かれ、礼に非ざれば動く勿かれ」ということであって、まさか「克己復礼」の四文字をじっと守って、その次にある（「礼に非ざれば視る勿かれ」等の）多くのことは省いてもよいというわけにはいくまい。君は『易』について、三百八十四爻がすべて天理の働きたりと大まかに言うばかりだが、もしそうであれば、『周易』はただ一言で済んでしまうことになる。それではなぜ聖人はあれほどの十翼を作り、冒頭から「大いなるかな乾元」云々、「至れるかな坤元」云々などと言ったのだろうか。聖賢の学は、老氏とは違う。老氏は「一に通ずれば、万事畢はる」と言つて、その他のことは論じず、そのうちにその一すらなくなつてこそよいと考えていた。学ぶ者はもちろん要点を考えなければならぬが、ひたすら要点ばかりを論じて、「点に与せん」の類ばかりに心を寄せていれは、おそらく視野が狭くなって收拾がつかなくなつてしまい、結局は仏老に流れ陥つてしまふだろう。それでどうして、（曾点の）「詠じて帰らん」の意味合いが分かるか。「黄義剛の記録も同じ。」

淳又曰「聖人千言萬語、都是日用間本分合做底工夫。只是立談之頃、要見總會一處、未易以一言決。」

曰^(段1)「不要說總會。如博我以文、約我以禮、博文便是要一一去用工、何曾說總會處。又如深造之以道、欲其自得之也⁽²⁾、深造以道、便是要一一用工、到自得、方是總會處。如顏子克己復禮⁽³⁾、亦須是非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、不成只守箇克己復禮、將下面許多都除了。如公說易、只大綱說箇三百八十四爻皆天理流行。若如此、一部周易只一句便了。聖人何故作許多十翼、從頭說大哉乾元⁽⁴⁾云云、至哉坤元⁽⁵⁾云云。聖賢之學、非老氏之比。老氏說通於一、^(段2)萬事畢⁽⁶⁾、其他都不說。少間又和那一都要無了、方好。學者固是要見總會處。而今只管^(段3)說箇總會處、如與點之類、只恐孤單沒合殺、下梢流入釋老去、如何會^(段4)有詠而歸⁽⁷⁾底意思。」「義剛同^(段5)。』

(校1) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校2) 楠本本は「萬事」の前に「而」が入る。

(校3) 楠本本は「管」の字を欠く。

(校4) 楠本本は「如何會」を「何」に作る。

(校5) 楠本本は末尾の小字注を欠く。

(1) 總會　すべてがそこに集約されるような総合的な要点。卷九・52条(一五五頁)「器遠問、窮事物之理、還當窮究箇總會處、如何。曰、不消說總會。凡是眼前底、都是事物。只管恁地逐項窮教到極至處、漸漸多、自貫通。然爲之總會者、心也」。

(2) 深造之以道、欲其自得之也　『孟子』離婁下。

(3) 顔子克己復禮レ 『論語』顔淵「顔淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲

仁由己、而由人乎哉。顔淵曰、請問其目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。」

(4) 大哉乾元 『易』乾卦・彖伝。

(5) 至哉坤元 『易』坤卦・彖伝。

(6) 老子説通於一、萬事畢 『莊子』天地「記曰、通於一而萬事畢、無心得而鬼神服」。ここでいう「記」とは、一説に老子の書であるという。『經典釈文』に「記曰、書名也。云老子所作」とある。

(7) 詠而歸 『論語』先進。所謂「点に与せん」の条。

(43条後半部担当 中嶋 諒)

【一一七・44 (校上)】

夜、再び寝室にお邪魔し、申し上げた。

陳淳「先ほど先生より痛切なるご教誨をたまわり、退出して考えてみました。一番の要は「下学して上達す」にあると分かりました。「下学して上達す」は、もちろん相對する二つのことですが、「下学」の方により多くの努力を費やさねばならないと存じます。」

朱子「聖賢が人を教える場合、「下学」のことを多く言い、「上達」のことは少ししか言わない。「下学」の修養の方を多くしなければならぬというのはよいが、単に「下学」だけに取り組んだのでは行き詰まっ

てしまふ。一つ一つの事に取り組んでいつて、やがてはそれらを貫通するものを理解しなければならないのだ。逆に、「下学」に取り組もうとせず、ただ「上達」ばかりを問題にしているならば、何もできなくなつて、応用が利かず無味乾燥になつてしまふ。程先生は「ただ自然、それ以上意識して求めることはない」と言われたが、自然である以上、意識して取り組むべきことはないということだ。たとえば耕作するには、種を蒔かなければならず、蒔いたらすぐ土を整えて灌漑を施し、その後でようやく收穫に至るのだ。收穫を夢見るばかりで、種を蒔かずにいて、どうして実ることがあろうか。（孔子が曾子に告げた）「一以て之を貫く」などは、聖人が究極のところ論及した言葉だ。もし「一」のところをひたすら想像するばかりで、「貫く」ものに取り組もうとしなければ、ちょうど銭差しを手に入れたのに、通すべき銭がないようなものだ。」

陳淳「学問修養は、おおよそ、身に即して言えば、この心があつて、心の本体が性、心の作用が情、外に対しては、目は見、耳は聞き、手はものを持ち足は地を踏むといったことがあり、事柄に即して言えば、親や長上に仕えることから、人や物事に対応し、掃除や応対、飲食起居に至るまで、一つ一つがすべて実践の努力のしどころです。聖賢の千言万語は、その細かな項目に他なりません。」

朱子「議論は議論として、実践の場面ではそれを着実に行なつていかねばならない。道理は聖人がすべて説き尽くしている。『論語』の中にもたくさんあり、『詩経』『書経』の中にもたくさんある。それら一つ一つに取り組んでいかねばならないのだ。程先生は（窮理について）「読書をして道義を明らかにしたり、古今の人物を論じてその是非を弁別したり、事物に対応してその当否を処断したり」と言われたが、どのよ

うであれば孝なのか、どのようなであれば忠なのか。果ては天が高く地が厚い理由、一つ一つの物の存在根拠に至るまで、逐一考えなければならぬ。「一」に通ずればそれですべてに通じるといふわけにはいかない。」

晩再入臥内、淳稟曰「適間蒙先生痛切之誨、退而思之、大要下學而上達⁽¹⁾。下學而⁽²⁾上達、固相對是兩事、然下學却當大段多著工夫。」曰⁽³⁾「聖賢教人、多說下學事、少說上達事。說下學工夫要多也好⁽⁴⁾、但只理會下學、又局促了。須事事理會過、將來也要知箇貫通處。不要⁽⁵⁾理會下學、只⁽⁶⁾理會上達、即都無事可做、⁽⁷⁾恐孤單⁽⁸⁾枯燥。程先生曰、但是自然、更無玩索⁽⁹⁾。既是自然、便都無可理會了。譬如耕田、須是下了種子⁽¹⁰⁾、便去耘⁽¹¹⁾鋤灌溉、然後到那熟處。而今只想象⁽¹²⁾那熟處、却不曾下得種子、如何會熟。如一以貫之⁽¹³⁾、是聖人論到極處了。而今只去想象⁽¹⁴⁾那一、不去理會那貫。譬如討一條錢索在此、都無錢可穿⁽¹⁵⁾」曰⁽¹⁶⁾「爲學工夫、大概在身則有箇心、心之體爲性、心之用爲情。外則目視耳聽、手持⁽¹⁷⁾足履、在事則自事親事長以至於待人接物、洒掃應對、飲食寢處、件件都是合做工夫處。聖賢千言萬語、便只是其中細碎條目。」曰⁽¹⁸⁾「講論時是如此講論、做工夫時須是著實去做。⁽¹⁹⁾道理聖人都說盡了。論語中有許多、詩書中有許多、須是一一與理會過方得。程先生謂或讀書講明道義、或論古今人物而別其是非、或應接事物而處其當否⁽²⁰⁾、如何而爲孝、如何而爲忠、以至天地之所以高厚、一物之所以然⁽²¹⁾、都逐一理會、不只是箇一⁽²²⁾便都了。」

(校1) 楠本本は本条冒頭から「都無錢可穿」までを卷一一五(一五八二頁)に収めて一条とし、「又問」

以下より「一便都了」までをそれに次ぐ一条とし、以下を欠く。

(校2) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「而」を「與」に作る。

(校3) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校4) 楠本本は「説下學工夫要多也好」を欠く。

(校5) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「要」を「去」に作る。

(校6) 楠本本は「只」の後ろに「去」が入る。

(校7) 楠本本は「恐」の前に「只」が入る。

(校8) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「須是下了種子」を「須是種了種子」に作る。

(校9) 楠本本は「耘」を「耨」に作る。

(校10) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「象」を「像」に作る。

(校11) 楠本本は「穿」の後ろに「去聲」の小字注が入る。

(校12) 楠本本は「又」の前に「淳」が入る。

(校13) 楠本本は「持」を「執」に作る。

(校14) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校15) 楠本本は「道理」の前に「凡」が入る。

(校16) 楠本本は「不只是箇一」を「不是只一箇」に作る。

(1) 下學而上達 『論語』憲問。

(2) 孤單 前条 (43条) 参照。

(3) 程先生曰く更無玩索 『遺書』卷十五・204条 (一七二頁) 「只歸之自然、則無可觀、更無可玩索」。

(4) 一以貫之 『論語』里仁。

(5) 譬如討一條錢索在此、都無錢可穿 卷二七・53条 (六八四頁) 「若江西學者都無一錢、只有一條索、不知把甚麼來穿」。

(6) 程先生謂く處其當否 『遺書』卷十八・27条 (一八八頁) 「窮理亦多端。或讀書講明義理、或論古今人物別其是非、或應事接物而處其當、皆窮理也」、『近思錄』卷三。

(7) 至天地之所以高厚、一物之所以然 『遺書』卷十八・48条 (一九三頁) 「問、觀物察已、還因見物反求諸身否。曰、不必如此說。物我一理。纔明彼即曉此、合内外之道也。語其大至天地之高厚、語其小至一物之所以然」、『近思錄』卷三。

そこで胡叔器 (安之) が質問した。

胡安之「『下学』というのは身近で切実なところで求めるといふことなのでしょうか。」

朱子「そのように選ぶ必要はない。物事が目の前にやって来れば、それに取り組むだけだ。読書にしても、第一章を読んでいる時には第一章を考え、第二章を読んでいる時には第二章を考える。今日このことに出会えば、それに取り組み、明日別のことに出会えば、それに取り組むのだ。あらゆる物事は道理は一つ、

まさか大きなものだけを選んで取り組み、その他は関わらないというわけにはいくまい。たとえば海水は、入り江だろうが隈だろうが、州だろうが渚だろうが、すべて海水だ。まさか大きなものだけが海水で、小さいのは海水でないとは言えまい。程先生は「窮理とは、必ず天下の理を窮め尽くさねばならぬというものでもなく、またただ一理を窮めれば達成されるというものでもない。ただ数多く積み重ねていってこそ、自ずとすつきりと悟るところがあるのだ」といい、また「一身のことから万物の理に至るまで、多くのことを理解すれば、自ずとからりと覺るところができる」と言われた。今の人は（孔子のいう）「博」に努める者は天下の理を窮め尽くそうとし、「約」に努める者は逆に（孟子の）「身に反りて誠ならば、則ち天下の物我に在らざる無し」と言うが、これはいずれも間違いだ。たとえば百のことについて、もし五、六十理解できておれば、残りの三、四十は理解していなくとも、大体は分かるものだ。私が漳州にいた頃、田畑をめぐって訴訟を起こしている者がおり、証書を数十本も持っていた。崇寧年間から訴えを起こして、取り調べが大変難しかった。その人は正式の証書を隠していて、まったく手の付けようがなかった。私はただ四方の田畑の証書を請求して突き合わせてみただけだが、境界ははっきりと明らかになった。それまでの判決を調査すると、その真偽はまったくごまかしようがなかった。」

朱子「かつてある役人が田畑を巡る訴訟に判決を下したが、わたしに裁判記録を取り沙汰されて、その役人は自ら標識を改竄したと思しき場所まで行って調査した。窮理というのもまた、このようなものに他ならないのだ。」「黄義剛の記録も同じ。」

胡叔器因問「下學莫只是就切近處求否。」曰「也不須恁地揀、事到面前、便與他理會。且如讀書、讀第一章、便與他理會第一章。讀第二章、便與他理會第二章。今日撞著這事、便與他理會這事。明日撞著那事、便與他理會那事。萬事只是一理。不成只揀大底要底理會、其他都不管。譬如海水、一灣一曲、一洲一渚、無非海水。不成道大底是海水、小底不是。程先生曰〔一〕、窮理者、非謂必盡窮天下之理、又非謂止窮得一理便到。但積累多後、自當脫然有悟處。又曰〔二〕、自一身之中以至萬物之理、理會得多、自當豁然有箇覺處。今人務博者、却要盡窮天下之理。務約者又謂反身而誠、則天下之物無不在我〔三〕、此皆不是。且如一百件事、理會得五六件了、這三四十件雖未理會、也大概可曉了。某在漳州〔四〕有訟田者、契數十本、自崇寧起來、事甚難考。其人將正契藏了、更不可理會。某但索四畔衆契比驗、四至〔五〕昭然。及驗前後所斷、情偽更不能逃。」又說「嘗有一官人斷爭田事、被某〔六〕掇了案、其官人却來那穿欵〔七〕處考出。窮理亦只是如此。」〔義剛同。〕

〔校1〕朝鮮整版・正中書局本は「某」を「其」に作る。

〔校2〕朝鮮整版は「欵」を「款」に作る。「欵」は俗字。

〔1〕程先生曰く 『遺書』卷二上・192条（四三頁）「所務於窮理者、非道須盡窮了天下萬物之理、又不道是窮得一理便到、只是要積累多後、自然見去」。なお、本条以下末尾に至る記録は、次に掲げる卷十八・18条（三九五頁、記録者陳淳）と酷似する。「明道云、窮理者、非謂必盡窮天下之理。又非謂止窮得一理便到。但積累多後、自當脫然有悟處。又曰、自一身之中以至萬物之理、理會得多、自當豁然有箇覺處。今人務博者却要盡窮天下之理、務約者又謂反身而誠、則天下之物無不在我者、皆不是。如一百件

事、理會得五六十件了、這三四十件雖未理會、也大概是如此。向來某在某處、有訟田者、契數十本、中間一段作偽。自崇寧政和間、至今不決。將正契及公案藏匿、皆不可考。某只索四畔眾契比驗、前後所斷情偽更不能逃者。窮理亦只是如此」。

(2) 又曰、自一身之中、 『遺書』卷十七・64条(二八一頁)「今人欲致知須要格物。物不必謂事物、然後謂之物也。自一身之中至萬物之理、但理會得多幾次、自然豁然有覺處」。

(3) 反身而誠、無不在我 『孟子』尽心上「孟子曰、萬物皆備於我矣。反身而誠、樂莫大焉。強恕而行、求仁莫近焉」。卷十八・107条(四一八頁)に「龜山說、只反身而誠、便天地萬物之理在我。胡文定却言、物物致察、宛轉歸己。見雲雷、知經綸。見山下出泉、知果行之類。惟伊川言不可只窮一理、亦不能徧窮天下萬物之理。某謂、須有先後緩急、久之亦要窮盡。如正蒙是盡窮萬物之理」とあり、同じく卷六一・42条(一四八九頁)に「近世如龜山之論便是如此、以爲反身而誠、則天下萬物之理皆備於我。萬物之理、須你逐一去看、理會過方可。如何會反身而誠了、天下萬物之理、便自然備於我。成个甚麼」とあることから、ここも楊時の格物説が念頭に置かれているか。楊時の格物説については以下を参照。『龜山集』卷十八・書三(「答李杭」)「明善在致知、致知在格物。號物之多、至於萬則物將有不可勝窮者。反身而誠、則舉天下之物在我矣。詩曰、天生烝民、有物有則。凡形色具於吾身者、無非物也。而各有則焉。反而求之、則天下之理得矣。由是而通天下之志、類萬物之情、參天地之化、其則不遠矣」。

(4) 某在漳州 朱熹は淳熙十六年(一一八九)知漳州に任ぜられ、翌年赴任する。『語類』卷一〇六・22条から38条は、その時の經驗を語ったものである。『朱熹年譜長編』卷下(九七一、九八一頁)参照。

(5) 四至

住宅や田畑の周囲の境界。

(6) 穿欵

未詳。『考文解義』に「未詳。疑穿是穿鑿、欵即欵識。謂穿改表識之可疑處」とある。

(44条担当 原信太郎 アレシヤンドレ)